

R18

ADULT ONLY

聖晶希石

エスフェール

Holy Crystal
Espère

Tinc
tionis



聖晶希石エスフェールこれまでのあらすじ

御珠学園高等部に通う少女、阿古屋結乃は、
聖晶希石エスフェールとして、歪んだ欲望によって
怪物化した存在——幻魔と戦い続けていた。
激闘の末、上位幻魔クォルツの封印に成功した結乃。
幼馴染の播磨晶とも結ばれて、平和で幸せな日々が
待っているはずだったが、快楽調教の後遺症として、
毎日のように淫夢を見るようになっており——。

○
広さは六畳ほどの部屋は、小綺麗に整頓されていた。

学習机の上には充電器に繋がれたスマートフォンとやりかけの宿題。本棚を埋めているのは大部分が漫画本。残りの半分が綺麗なままの参考書が数冊と、アクセサリの本が数冊。そして一人用の寝台の上で、ひと組の男女が肌を重ねていた。

この部屋の主である播磨晶と、その幼馴染にして、十余年の末に結ばれた恋人である阿古屋結乃だった。

「結乃……結乃っ……」

純白のシーツの上で、晶は腰を振る。屹立した肉の槍は、結乃の内側を往復していく。春の終わり、初夏の到来を感じさせる気温の中、二人の肌には汗が滲んでいる。紅潮した肌が濡れ、生まれる艶はどこか淫靡で、恋人たちの興奮を膨らませていく。

「あっくん……っ♡」

自身を呼ぶ恋人の声に、結乃もまた甘い声で応える。ただそれだけで、全身を包む多幸感は何倍にも膨らんだ。

結乃は繋いでいた両手を離すと、晶の背へと回す。鍛え上げられたというほどではないものの、自分と比べればはるかに硬い、筋肉質な背中の感触が愛おしくて、抱き寄せる。ぐにゅりと。晶の裸体の胸板に、結乃の豊乳が押しつけられる。軟らかな肉鞠は押し

つけられたままに変形し、卑猥にピンと硬直した先端が胸板との間で転がり、結乃に官能の電流を送り込む。

結乃自身の動作を真似るように、膣がきゅう、と締め付けを強くする。晶の怒張を、結乃の膣壁が抱き締める。とうの前からギリギリで耐えていた晶を追い詰めるのに充分すぎる刺激だった。

バネ仕掛けの玩具のような動きで、晶は腰を突き込んだ。晶自身の意思とは無関係な、牡としての反射動作。根元まで挿入さった肉棒が、大量の愛液を押し出して飛沫させる。

「結乃っ、射精るっ……」

辛うじて晶にもできたのは、か細い声でそう報告することだけだった。

根元から、ぐつぐつと煮え滾った欲望が駆け上がっていく。最愛の恋人を穢してはいけないという理性と同時に、目の前の魅力的な女に、己の恋人である証を刻み込みたいという獣欲もある。猛烈な獣欲に対して、快楽に蕩かされた理性はあまりにも無力だった。

晶は腰を引き抜くのではなく、体重をかけて自分自身を突き込んだ。

痛いほどに怒張した肉の槍を、晶の欲望が駆け抜けて、結乃の奥へと放つ。

ドクッ、ドクドクッ、と。晶の肉槍が脈を打ち、結乃の内側に自分を注いでゆく。

「んっ♡ ああっ……あつくんっ……♡ わたしもっ、イクッ♡ んんっ——♡」

結乃の華奢な身体が仰け反り、豊満な乳房がたゆんっ、と大きく揺れる。

その官能的な光景に、晶はさらにぐぐっ、と腰を押し込む。すっかり降りてきている子

宮が、亀頭に吸いついてくるような感触。今この瞬間にも、晶は精一杯吐き出していると、いうのに、もっと、もっととねだられているような感覚すらあった。

性的な興奮に加圧されて、心臓はバクンバクンと内側から破裂しそうなほどに激しく鼓動する。荒ぶる血流が海綿体に流れ込み、結乃の求めに応じて晶は限界以上に精を吐いた。

「く、あ……はあ……はあ……はあ……」

一瞬だったようにも、数十分も続けていたようにも思える射精が終わった頃には、晶はフルマラソンを終えたような疲労感に包まれていた。

ベッドに突いた両手が、自分自身の身体を支えることも億劫で、晶はそのまま、ゆつくりと身体を結乃に預けた。

「んっ……♡ 重たいよ、あつくん……」

「ごめん、ちょっと疲れてさ……」

結乃は晶に文句を言いつつも、どこそうとすることは無い。それどころか、満足げな笑みを浮かべたまま、手を背中になわす。

ぎゅう、と。強引ではなく、しかし力の籠もった抱擁。胸と胸とが重なり合う。結乃の柔らかい豊乳越しにも、心臓の鼓動が伝わってくる。

晶ほどではないものの、結乃の心臓もまた激しく脈を打っていた。そんな、なにげない共通点さえも、今の晶には嬉しかった。

まだ落ち着かない荒い息が、静かな部屋の中にやけに大きく聞こえる。

嫌な沈黙ではない。

快楽の余韻は抜けきらず、繋がったまま、汗だらけの身体は、身体だけではなく心まで繋がって、溶け合ったままのような錯覚を与えていた。

「結乃、抜くぞ」

「うん……」

いくらか落ち着いてきて、晶はゆっくりと、結乃の内側から自分自身を引き抜いてゆく。貪欲な結乃の内壁に刺激されると、最後まで搾り出したばかりだということのほのかに硬度が戻りそうにさえた。

結乃の膣口が、名残惜しむように亀頭を咥え込み、抜け落ちるのを拒絶する。それでも晶が腰を引くと、ようやく晶は解放された。

「んんっ……♥」

ぴたりと閉じた桃色の割れ目から、今しがた晶が注ぎ込んだばかりの白濁がドロリと溢れる。結乃が真珠の指輪を嵌めた右手を股間にかざすと、情事の痕跡は光に還元されて霧散した。

ふう、と息を吐き出すと、晶は寝台に身体を横たえる。

「結乃……」

「なに、あつくん？」

「満足、させられたか？」

問いかけに、結乃が息を飲んだように晶は感じた。だがそれも一瞬。

「うん……あつくんの気持ち……あったかい」

結乃の腕が、晶の身体をより強く抱き寄せる。晶もまた、それに応えた。

結乃がクォルツを封印してから、半月ほどが経っていた。

幻魔の与える魔性の快楽は、どれほど貞淑な乙女であっても色狂いへと墮落させる。

希晶石の加護と、たぐいまれな精神力によって墮落の誘惑をはね除けた結乃だが、クォルツによる快楽調教の後遺症は、今なお結乃の身体を苛み続けている。

性欲は以前の比ではないほどに増し、ほんのわずかな性的刺激や、他者の情欲を向けられることで強烈な発情状態に陥ってしまう淫らな身体となっている。

晶はそんな結乃を支えるために、毎晩こうして肌を重ねている。

それでも、毎日のようにという比喩ではなく、半月の間、文字通り毎日、身体を求められていては、いかに思春期の男子学生で精のつく食事を心がけていることを合わせても、体力も精力も限界なのは事実だった。

「ごめんね。こんな、毎日……」

「謝るなよ。そんな必要ないって」

晶には、結乃に対する不満があるわけではない。幼い頃から恋し続けていた、そして同じくらい昔から自分のことを好いてくれていた恋人が、自分を異性として求めてくれているのだ。やりたい盛り、などとすら呼ばれる年頃の晶にとって、それは嬉しくこそあって

も、嫌がるようなことではない。

問題は、自分が本当に結乃を満たすことができているのか、ということだった。

結乃の謝罪の言葉で、晶の中でなにかが弾けた。本当の恋人になってから、ずっと心に秘めてきた気持ちだった。

「結乃はさ、頑張ったんだよ」

「え……？」

突然の言葉に、結乃は目を白黒させる。

「義務なんてないのに、それでも結乃は色んな人を、なんの見返りもなしに助けてきたんだ。頑張ったんだから、ワガママくらい言っても良いに決まってる。だから、俺になんて謝る必要ないんだよ」

優しく、諭すように晶が告げると、結乃は両の目を伏せた。

すう、と。息を吸い、吐き出す。そしてゆっくりと、晶を見た。

「……あつくくんは覚えてる？ 昔、私が溺れそうになったとき、助けてくれたこと」

結乃の言葉に、晶は頷いた。忘れるわけもない。

もう、随分と昔のことだ。その頃、晶は既に結乃に恋していたが、仲が良いと言えるような距離感ではなかった。

あの日も、一緒に遊ぼうとして断られ、それでも一人でどこかに行ってしまった結乃を探していて、溺れそうになっている結乃を見つけたのだ。そのときのことを思い出して、

晶は羞恥心に頬を染める。

「あれは……助けようとして、結局は近くにいたおじさんに一緒に助けられちゃったじゃないか」

そう。あのときは結局、晶は結乃を助けることはできなかった。慌てて湖に飛び込んだ晶の着水音で気付いた男性が、二人揃って助け出したというのが、事の真相である。

結乃からは感謝されたものの、晶からすれば、格好を付けた末に一緒に助け出された恥ずかしい過去だった。

「私ね。あのときからあっくんのこと好きになったんだよ」

「えっ？ いや、なんで……？」

突然の告白に、今度は晶が驚く番だった。

「あっくんは恥ずかしがるけど、そんなことなかったよ。もちろん、助けられる力があつたなら、その方が良かったかもしれない。でも、私は……できるかどうかを考えるよりも先に、助けようとしちゃうあっくんが、眩しく見えたの。私も、そんな風になりたい。そうやって憧れてるうちに、あっくんのこと見ているうちに、いつの間にか好きになった」

とくん、とくんと、心臓の鼓動が伝わってくる。温かく、優しい鼓動。

「それは……」

わずかに、晶は躊躇して、それでも小さく首を振った。

「それは、違う。俺は……あのときもう、結乃のことが好きだった。だから、考えなしに助けようとしちゃったただけだ。誰が相手でも思わず助けに入っちゃまう、そんな格好良いヒーローじゃない」

「そんなことないよ」

晶の否定を、さらなる結乃の言葉が否定した。

「私が、クオルツと戦ってたとき、あつくんは助けてくれたよ。希晶石の力で私のことを私だって気付けなかったはずなのに」

「結乃……」

「おかげで私は思い出せた。私が憧れていた正義の味方はこんなに格好良かったんだ、こんなところで諦めてなんてられない、って。だから私はクオルツを倒せたんだよ」

「でも、そのせいで……」

そこまで言って、晶は言葉を続けるのを躊躇した。

あのとき、自分が介入したせいで、クオルツは結^{エスフェール}乃と晶の関係性に気付いた。そして、

晶の肉体を乗っ取って、結乃を犯した。

結乃がそれを責めることはなくとも、あるいは責められないからこそ、晶の中で自責の念は募っていた。

「あつくん」

結乃が、抱擁を解いた。心臓の鼓動も、肌の柔らかさも温もりも失われ、真珠のように

丸い瞳が、結乃を咎めるように見つめる。

「いくらあつくんでも、それ以上、私の大好きな人のことを悪く言うのは許さないから」
晶は一瞬、何を言われたのか理解できなかった。結乃の口から放たれた、大好きな人、という言葉に、心臓が捻れるような激痛を感じた。自分以外の誰を好きなのかと思考は空転をはじめた。だがそれも、結乃が続けた言葉が止めた。

「あつくんは、あのときからずっと、私の憧れなんだから」

その言葉で、晶はようやく、結乃が口にした冗談の意味を理解した。

物理的な痛みすら生じはじめていた胸の痛みは治まっていき、代わりに先ほどのむず痒さが戻ってくる。

「街を守る正義の変身ヒロインにそんなこと言われたら、カッコ悪いところ見せられないじゃないか」

「ううん……いいの」

「いいのって、何がだよ？」

「カッコ悪いところもあわせて、あつくんのことが好きだから」

「他人が言ってるの聞いてたらウゲッってなりそうなくらい、恥ずかしい台詞だな」

「あつくんだって、齒の浮くようなクサイ台詞言うじゃない」

「そ、そうか……？ い、いやっ、でもほら、そんな俺も好きなんだろ？ だったら、いいよ。結乃に好きでいてもらえるならさ」

「あつくん……」

「それと、結乃もそうだぞ」

「私も？ 何のこと？」

首を傾げる結乃の仕草を可愛らしいと思いながら、晶は結乃を見つめ返す。

「俺だって、お前に負けないくらい、結乃のことが好きだ。罪悪感とか、後悔とか、あると思うし、忘れることなんてできないと思うけど、それで自分のことを嫌ったり、汚いものみたいに思うな」

そこまで言って、晶は笑みを浮かべる。

「いくら結乃でも、俺が好きな人のことを悪く思うのは許さないぞ」

結乃に言われたのと同様の言葉を、晶は冗談めかして告げる。

晶の言葉に、結乃は驚いたように目を見開いていた。真珠のような瞳が揺れていた。

「で、でも……私、こんなにエッチになっちゃったし……」

結乃の喉から溢れた、そんな反論に、晶は笑った。作ろうとして浮かべた笑いではなく、自然と漏れた笑いだった。

「エロい女が嫌いな男がいるわけないだろ。男子高校生の性欲ナメんなよ？ 野性のサルの方がまだマシなくらいだぞ？ どんなブスでも乳と尻が揺れてたら見ちゃうのが男ってもんだ」

晶の言葉に、結乃も笑った。無理のある笑い方ではなく、心からの笑みに見えた。ひと

しきり笑ってから、それはそれとして、と前置きをしてから、結乃の目が冷える。

「さすがに節操なさすぎ。あと、他の男の人に対する風評被害だと思うよ？」

「そんなことない。男っていうのはそういう生き物なの」

晶ももはや引っ込みはつかず、そう言い切ると、軽蔑の色を帯びていた結乃の瞳が呆れの色に変わる。そしてどちらからともなく、再び笑みが零れた。

「……ま、あんまり思い詰めでくれよ。相談だったらいくらでも乗るからさ」

晶の言葉に、結乃は頷く。

「うん……ありがと……あつくん。大好きだよ」

そう言って、結乃はなにかを期待するように目を閉じて、顔を上げた。

「俺もだ。結乃……愛してる」

想いを言葉にして交わしあい、二人は手を握り、唇を重ねた。

月の明かりは二人を祝福しているようだった。



晶の部屋から帰った結乃は、シャワーを浴びることもなく、自室の寝台に倒れ込んだ。くちゅりと。下着から粘ついた音が出る。希晶石の力で、注がれた精液は浄化したものの、注ぎ込まれた晶の想いはまだ残っているように思えた。

「あつくん……」

晶に告げられた言葉を思い出して、自然と頬が緩む。

晶に愛されていることはわかっていた。毎日、肌を重ねるたびにも愛の言葉は口にしてくれていた。それでも、先ほどのように、熱い想いを語られて、嬉しくないはずがない。

「んっ……」

ピロートークを終えてさほど時間も経っていないのに、記憶の反芻が結乃の身体を再び火照らせてゆく。

違和感を覚えることもなく、自然な流れで結乃は自身の指を股間へと向かわせていた。ぐちゅっ、と。

ショーツのクロッチに触れた指先が音を立てる。下着の上から割れ目をなぞると、濡れた布地はぴたりと閉じた女陰のかたちをくつきりと浮かび上がらせていく。

「あつくん……」

優しく、優しく、硝子細工ガラスを扱うように愛撫する。ほんの一时间ほど前に、晶がしてくれたことを、自分の指で再現していく。

快楽の量は多くはない。沸々とお腹の奥でもどかしさが似たってゆく。

喉を抜ける息は、自分自身の興奮の熱で、火傷しそうなほどに熱かった。

——足りない。

優しい愛撫の記憶をなぞればなぞるほど、切なさが増していく。入口ではなくもっと深

い部分が快楽を求めている。

下着越しでは足らなくて、結乃の手はショーツの内側に潜り込んだ。直接触れる秘唇は茹だるように熱く、蕩けきっている。

指先が、秘唇を割って内側へと挿入^{はい}ってゆく。

晶相手ならば、心の満たされる感触。だが今は、心ではなく、肉の欲求を満たすためにそれを行う。

「あ、あ……んっ♡」

ずぶぶつ、と。人差し指と中指が一気に肉壺に埋まる。二本を束ねた指の太さの分だけ、熱い蜜液が飛び散った。浅い、しかし確かな絶頂。

晶ならもっとゆつくりと挿入する。しかし、記憶を再現しているはずの結乃の手は、それよりはるかに乱暴な挿入を果たしていた。

結乃の中に、比較をしている自分がいた。晶と肌を重ねれば重ねるほどに、その違いを感じてしまった。

——誰と？ なにと？

腹の底から、そんな問いかけが響く。答えは明らかだった。明らかだからこそ、結乃は首を振った。答えに辿りつくのが怖くて、結乃は快楽に身を投じた。

晶のことを想いながら、しかし結乃の指の動きは激しさを増していく。

優しく、確かめるような動きではなく、激しく、暴力的ですらある抽送の再現。

晶の動きを再現しないことを、晶以外を再現することを、裏切りのようにも感じる。だがそれすらも、淫熱にふやけた思考は興奮の材料に変えてしまう。

あれほどに愛した相手を、あれほどに愛してくる相手を、あれほど優しい言葉をかけてくれる相手を、裏切る背徳。

ゾクリッと。背筋を熱い情感が駆け上がる。

胎の奥に、燃え盛る火の玉が飛び込んできたような強烈な熱が生まれた。結乃の火照りを表すように、下腹に妖しい紋様が浮かび上がる。クオルツの残していた置き土産。今なお結乃を苦しめる邪淫の残り香が、その存在を主張する。

「はあ……はあ……あ、あ……♡」

息を吸い、吐き出す。取り込んだ酸素を燃料に、結乃の身体は熱を生み出す。

ぐちゅっ、ぐちゅっ、と。強い粘りを帯びた音が、甘い嬌声に紛れて響く。

「んっ……くっ、あっ……♡」

粘音と共に溢れる声は、どんどん大きくなっていく。ともすれば、屋根を挟んでほんの数メートル先にある晶に届いてもおかしくないほどに。

結乃の持つ希晶石が、部屋の中の音を閉ざす結界を展開する。習慣付いて、ほとんど無意識に行うようになっていた。

ぐちゅ、ぐちゅっ、と指の抽送が激しい音を立て、官能が高まってゆく。

「いっ、イクッ、イクウウッ♡」

ここにはいない誰かに向けて報告するように、結乃は己の絶頂を宣言する。直後、それはやってきた。

視界が白と黒との明滅を繰り返し、思考が漂白される。

以前なら、一度達したら熱が引いていくものだった。一度で完全に冷めることはなくとも、いくらか落ち着くものだった。しかし、最近は違った。

絶頂に達すれば達するだけ、その先を求めてしまう。あの日、屈服の宣言とともに与えられた、おぞましくも甘美な官能。

理性と呼べるような、結乃を繋ぎ止めるものは残っていなかった。絶頂直後のふやけた思考は、さらにその先にある快楽を求めてしまう。

指が、ぐちょぐちょになったクロツチを糸を引きながら除けると、つけたままだった希晶石が、紫に近い妖しく光を帯びた。

希晶石は、所有者の希望^{ネガイ}を源に、物理法則を超越した事象を起こす。今もまた、その機能^{ネガイ}が発揮^{カタチ}されていた。

欲望^{ネガイ}が、現実^{カタチ}になっていく。

結乃の身体とシーツの隙間、結乃自身の影の奥から、何かが生まれた。

それは一本の触手だった。幻魔が獲物を捕らえ、犯すときに使うのと同じ、人を狂わせるための器官。その先端の形状を結乃はよく知っている。太さも、形状も、先ほどまで自分の中に受け入れていた、最愛の男性^{ヒト}の形状^{カタチ}。目にしただけで、その匂いも、味も、感触

も、すべてが連鎖的に思い出されて身体の火照りを加速させる。

「キてえ……♡」

股を大きく開き、自身の入口を両手で広げる結乃の求めに、触手は躊躇なく応じた。ずずっ、ずぶぶっ！

結乃の細い指先を二本重ねたものよりも太く、硬い肉の槍が、結乃の膣道を押し拡げてゆく。最愛の男性^{ヒト}としたばかりのことと同じ行為。そのはずなのに、叩きつけるような突き込みに結乃は肉の充足を得ていた。

いつの間にか、すっかり降りてきていた子宮の入口に、亀頭が届く。届いた上で、ぐりぐりと、こじ開けるように力がかけられる。

「あ、ああっ……♡ イイツ♡ 奥、届いてっ……♡」

甘い、甘い、媚びるような鳴き声。

快楽に蕩け潤んだ結乃の真珠の瞳は、幻を映していた。

ただ肉棒を再現しただけの触手に、最愛の男性^{ヒト}を幻視する。抱き寄せる身体を持たない触手に、結乃は抱きつくように腕を伸ばした。応えるように、触手が抽送を開始する。

深く、長く、暴力的な突き込み。

愛情を送り込むつもりなど微塵もなく、ただ自分が気持ちよくなるための動き。その身勝手な暴力性が、今の結乃には心地良くすらあった。

抱きつくように肉槍を締めつけながら、突き込まれる衝撃を、自ら腰を振ってより深く

強く感じようとする。娼婦のように媚びる結乃に、意思など持たないはずの触手が抽送を加速させた。

「もっ、と……」

亀頭を叩きつけられるたびに、子宮が渴くのを感じていた。部活中、夢中で泳ぎ続けたあとの喉の渴きにも似た飢餓感。

「もっとお……♡」

欲しい。

欲しい。

欲しい。

餓えて——望む。

そんな欲求が、結乃の内側を満たしていた。

下腹の熱が耐えがたいほど強くなって、快楽を求める欲求以外の思考が塗り潰されていく。

——言え。結乃。何が欲しい？

鼓膜を揺らす音ではなく、子宮を揺らす声がある。

「だ、めっ……だめえ……♡」

その言葉に、結乃はふるふると首を横に振った。邪魔な何かが、その言葉を口にすることを拒んでいた。

——何を我慢する？ 欲しいのならば求めれば良い。

甘い言葉を囁きながら、触手は容赦なく結乃の膣奥を責め立てて、結乃の視界は明滅を繰り返す。そのたびに、その言葉を押し留めていた堰が緩んでゆく。

——こうされたいのだろうか？ この——淫乱っ！

ひととき強く、膣奥が叩かれて、その強さに比例した巨大な浮遊感が結乃を突き上げた。

「んひい——っ♡」

それがトドメだった。

理性はとうに蕩けきって、その声が誰のものかも、その意味さえもわからない。そのはずなのに、理性ではなく、本能が答えを出していた。

『御主人様の、どろっどろのザーメン……私の子宮に、注いでくださいいっ♡』

舌は呂律もまわらない。実際に口から出ていたのは発情期の獣のような喘ぎ声でしかなかったのかもしれない。しかし結乃の魂はその欲求^{ネガイ}を露わ^{あら}した。

誰かが、どこかで、笑ったような感覚を覚え、直後、結乃の願望^{ネガイ}は叶えられた。

びゅるっ、びゅるるるるうっ！

水道の蛇口をいきなり全開にしたような猛烈な勢いで、晶を摸した肉の槍が精を放った。連日の行為続きで勢いの衰えた晶のものよりもはるかに大量の欲望が、結乃の子宮^{ココロ}を満たしてゆく。

「あぁっ♡ しゅごいっ♡ イクッ♡ イクイクイクウウウツ——♡」

充足感に、結乃は今日最大の絶頂に到達する。晶の熱い想いを受けたときの何倍、何十倍も強烈な快感が、阿古屋結乃という存在を歪めんほどの熱量で融かす。蕩けた理性が弾けるように、結乃は勢いよく潮を噴いた。

「あひ……んっ♡ ああ……♡ はあ……♡ あっ……くんう……♡」

弾けて爆ぜた意識が、再び像を結ぶことなく、結乃の意識は深い闇へと沈んでゆく。向かう先は、淫夢の世界。

愛おしい人の顔を、蕩けた脳裏に浮かべたまま、結乃は幸福な淫夢に溺れていった。



淫夢を見た。
淫夢を見た。
淫夢を見た。
淫夢を見た。

今日もまた——淫夢を見る。



カーテンの隙間から朝の日差しが入り込んでいた。

頬を照らされるそのまぶしさに、結乃はゆっくりと目を開けてゆく。

記憶があった。

いくつもの、数えきれないくらいの、経験と記憶。

淫夢だ。

何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も淫夢を見た。

内容は、目を覚ませばすぐに薄れて消えてゆく。覚えているのはただ、それがどうしようもないくらいにいやらしい淫夢だったということだけ。

「私……」

ぶるりと、結乃は恐怖に身体を震わせる。

自分が、内側から自分ではないナニカに塗り潰されてしまいそうだった。

恐怖に抗う勇気が欲しくて、結乃は最愛の男性の名を呼ぼうとして、

「

空白。

いつでも心の奥底にあるはずの、その顔も、名前も、出てこなかった。

悲鳴を上げて、喚き散らしてしまいそうになった。

心臓が早鐘を打つ。全力泳の直後以上に、激しく脈を打っていた。

結乃は寝台から飛び起きて、勉強机の鍵のついた引き出しを開ける。中にあるのは使い

込まれたルーズリーフホルダー。その表紙には、他ならぬ結乃自身の文字で、阿古屋結乃という名前と、日記帳という用途が記されている。

縫るように、結乃はそれを開いた。

——あつくん。

日記帳の至るところに記されたその名を目にして、結乃の脳裏に、なくてはならないものが蘇る。

結乃の根幹。今の結乃を形作るのに不可欠な存在。誰よりも大切な、最愛の人。

名前が、顔が、性格が、思い出が、すべてが一気に帰ってくる。

「あつくん……」

震えた声で、結乃はその名前を呼ぶ。

「あつくん……あつくん……」

二度、三度、結乃はその名を繰り返す。寝惚けているという理由だけで忘れるはずのない、自分自身の名前以上に大事な名前。それを忘れていたということが、淫夢ユメを見る——自分がどんないやらしい存在になっていくことよりも、結乃にははるかに恐ろしかった。

○

「はあ……」

溜息を吐き出しながら、晶は駅への道を歩いていた。

晶の家から駅まで、歩いて十五分程度の距離にある。自宅の近くに路線バスの停留所もあるものの、大回りするせいでかかる時間は大差ない上、バスに乗るほどの距離ではない。今日は結乃とはじめてのデートの日だった。

不満なんてあるはずもなく、思わずスキップすらしてしまうほどに胸が躍る日のはずだ。もちろん、今この瞬間待ち合わせ場所である駅前まで向かう最中も、楽しみであることには変わらない。九割の期待と一割の不満。否、九割九分の期待に、一分の不満があるだけだった。

不満の原因は他でもない。待ち合わせの場所だ。

晶の家と結乃の家は、屋根を伝って行き来ができるほどの距離にある隣家だ。デートが決まったときに、当然のように晶は家まで迎えに行くと申し出た。迎えに行くと言ってもほんの数メートルの移動。最寄のバス停よりもずっと近い。

しかしそんな晶に対し、結乃は「こういうときは駅前で待ち合わせするの」と言い張って譲ろうとはしなかったし、女心がわかっていないと叱られさえもした。

少女漫画の読みすぎではないかと思いきそしたものの、そこにこだわって可愛い彼女の機嫌を損ねる必要もないと晶は受け入れたのだ。

しかし当日となって駅までの道を歩いていると、不満の気持ちは膨らんでいく。ほんの十五分と言ってしまえばそこまではある。しかしたった十五分程度であっても、

一緒に歩き、話したい。そんな結乃への気持ち募っていったからだ。

そうやって何度か溜息を吐きながら、晶は待ち合わせ場所である改札前に辿りついた。約束の時間よりも三十分も早く到着した晶は、待てば待つほどに結乃を恋しく感じていた。

「ヤバいな……こりゃ結乃依存症だ」

何日も、何週間も離れ離れというわけではないというのに、ほんの一時間にも満たない時間、会えずに焦れるだけで溜まっていく苛立ちと焦燥に、晶は自嘲する。

スマートフォンの時計表示を焦れたように追い続けてしばらく。約束の時間の五分ほど前になった頃に、晶は背後から声を掛けられた。

「あっくん」

聞き慣れた。そしてこの数十分ずっと聞きたかったその声に、晶はいくらか過剰なくらいの勢いで振り向いた。

振り向いた先には、ベージュのワンピース姿の結乃が立っていた。

私服姿の結乃というだけなら、それこそ何百、何千回と見たことがある。しかし今日の結乃はいつもとは違った。

晶は女性のファッションについて詳しくはない。結乃が着ているワンピースも履いているサンダルもどこのブランドなどかもわからない。どこをポイントにして、どんなコーディネートネーティストイルなのか語られたところでなにひとつ理解できなかつただろう。

ただ、可憐だった。結乃が今回のデートを楽しみにしていたのだということが、服装の気合の入り方から伝わってきて、嬉しかった。

もし玄関先で同じ姿を見せられたとして、嬉しかったことには変わりないだろうが、同じだけの感動があったかどうかはわからなかった。

こんな感動を得られるのであれば、数十分くらい時間を共有できないことを受け入れるべきだったな、と思っていると、可憐な顔立ちはどこか機嫌を損ねているように見えた。

「……えっと、よう結乃」

「おはよう。あつくん」

挨拶こそ返してきたものの、結乃の機嫌は直らなかった。しかし晶は待ち合わせ時間の三十分も前には着いていた。遅刻で文句を言われる筋合いはない。

「あのさ……どうかしたのか？」

「どう？」

晶の質問に対する結乃の答えは短い問い返しだった。

「え？ あ？ うん、今日は一日晴れらしいから大丈夫じゃないか？」

結乃に見蕩れたままだった晶は頭もうまく回らずに、間抜けな回答をさらに返した。しかしその回答に、結乃の苛立ちは明らかに増した。

「そうじゃなくて、今日の私！」

声を荒げた結乃に、言われて、晶は自分が見蕩れるだけで、感想を口にしていなかった

ことに気付いた。同時に、自分の評価を気にする恋人のことがたまらなく愛おしく、可愛らしく感じた。

「すげえ可愛い。見蕩れちゃったよ。それで……てっきり感想言ったつもりになってた。悪い。すげえ似合ってる」

愛おしさが有り余って、思ったままの感想がそのまま口をついた。感想を求めていた結乃だったが、晶がそう言うのと途端に頬を赤く染めた。

「その……いつもとあんまり、変わらないんだけど……」

誉められすぎて恥ずかしくなったのか、顔を背けつつも、晶の視線を気にしてチラチラと振り返ってくる恋人の姿が、魅力的で仕方がなかった。

晶は結乃の魅力を誰よりも理解しているつもりだった。しかしいざ恋人となると、その見え方はまるで変わった。

歩き方、視線、会話のリズム。そのどれもが、以前通りであるのに、居心地が良いものだった。

「こんなことなら——」

そこまで言って、続けようとしていたのがあまりにも恥ずかしい台詞だと気付いて、晶は言葉を止めた。

「え？　なあに？」

しかしそれを耳ざとく聞きつけた結乃に聞き返されては、なかったことにはできなかつ

た。晶はわずかに「あー」や「えー」と言葉を濁すも、結局は思ったままの言葉を口にした。

「こんなに可愛い結乃が見られるなら、もっと早く告白しておけばよかった、って思ったんだよ」

「あつくん……」

一緒にいない時間を勿体なく感じるというならば、その躊躇こそが最大の後悔だった。照れる様子もまた愛らしくて、晶は結乃をじっくりと見つめる。呼吸のリズム、上下する胸の膨らみ。

「……あつくん、目つきがえっち」

「わ、わるい……」

——その乳を見るなというのは無理があるだろ。

そんな言葉に限っては、言いかけることもなく止められた自分がとても賢明に思えた。代わりに、晶は手を出した。結乃も、照れるようにはに cand、その手を取った。互いの手の温もりを、伝わってくる鼓動を感じながら、二人はデートに向かった。



夕闇に染まった街並みを晶は歩いていた。

ウィンドウショッピング未満の、店を探して歩き回ることを繰り返して、時間はもう二十時を過ぎている。場所も商店の多いあたりから、ホテル街に近い位置まで移動してしまっていた。

目的は、結乃への誕生日祝いに行く店のリサーチだった。

プレゼント自体はもう決まっている。それはもつとずっと前、それこそ一年前の誕生日を過ぎた頃から計画していたものだ。

例年ならば、プレゼントを渡す以上のことはしない。せいぜい家族もあわせてケーキを食べる程度だ。しかし今年は二人の関係は大きく変わった。片想いしている幼馴染ではなく、互いの想いを確認しあった恋人同士になったのだから、幼馴染としての立場と変わらないのではつまらない。幸いなことに、両家の両親も二人の交際には賛成してくれていた。まして、今回は恋人になってからののはじめての誕生日。ともなれば、なにか特別な思い出にしたいと思うのも当然のことだった。

「それに――」

誰に言うでもなく、晶は独りごちる。

結乃が苦しんでいることを晶は知っている。

エスフェールとして、幻魔と戦う使命を課せられ、その身を穢された。

晶は結乃ではない。

あの瞬間、結乃がどれほどの快楽に襲われていたのか、どれだけ耐えがたい快感であつ

たのか、想像することはできても、完全に理解することなどできない。

それゆえに、快楽を選んでしまった結乃を責めるつもりは晶にはない。だが、快楽に負けた結乃を何よりも嫌悪しているのは、他ならぬ結乃自身であることを晶はわかっていた。結乃は、表面上は吹っ切れたように見せている。晶の告白も、心の傷を埋めるひとつの要員とはなっているという自負もあった。実際、少しずつではあるものの、結乃の表情に暗いものが浮かぶ頻度は下がっている。それでも、そう簡単にすべてを忘れて元通りに戻することはできないのだろう。

（結乃のためなら……なんだってやるさ）

恋人のために、少しでも喜んでもらえる食事を選ぶ。そうすることで結乃の心の暗闇が少しでも祓えるのであれば、その労力を苦に感じることもなかった。

「つつても……何が良いんだかな。やっぱりネットのレビューサイトか？」

頭を捻りながら、晶は過去の誕生日を思い返す。

結乃への誕生日プレゼント自体は昔から続けていた。

摘んできた花、拾ってきた綺麗な石、ヘアゴムにヘアピン。今思い返せばもつとまともなものをプレゼントしておくべきだったかもしれないと思うものの、当時の結乃はどれも喜んで受け取って、大事そうにしまっていた。気に入っていた日記帳が書ききれなくなりそうだと聞いたときにはルーズリーフのバインダーをプレゼントした。

それに——父方の実家である神社の蔵で見つけた真珠の大玉。神主を務める祖父に確認

すると、好きにして良いと言われたのだ。

叔父がやっている宝飾店になけなしの小遣いをはたいて格安で加工してもらったのが、結乃の持つ希晶石の指輪だった。

「もし――」

ふと、晶は疑問に思う。

結乃に指輪をプレゼントしたとき、晶はそれが特別なものであるとは思っていなかった。大昔にプレゼントした、道端で拾った綺麗な石と同じような感覚でしかなかった。

もし、それが特別なものであると、結乃を苛烈な使命に挑ませるものと気付いていたら、自分はこうしただろうか、と。

「……んなこと、考えても意味ないよな」

自分の疑問を、晶は首を振って否定する。

現状のすべてを、最善の結果だとは晶は思わない。しかし今、自分と結乃は恋人同士で、幸せでいる。もしこれまでの何かが欠けて、傷つく経験をしなかった可能性よりも、傷ついた末の現状の方が良いと思えた。

「指輪、か……」

呟いて、晶は叔父に頼み込んで作ってもらったとおきのプレゼントのことを思い浮かべる。

幻魔を生みだしていた元凶であるクォルツを封印しても、幻魔はまだ、そのすべてが滅

びたわけではない。クオルツが封印される以前に生み出された幻魔たちが、今もこの街に潜んでいるのだ。だから、結^{エスフェール}乃の戦いはまだ終わらない。終えるわけにはいかないのだと、結乃は言っていた。

それでも、幻魔の現れる頻度が減りつつあるのは事実だった。遠からず訪れる戦いの終わりを前に、自分の正義を貫くための力とは別に、自分の想いの形を渡したい。

「そのためにも、親父にでもいい店聞いとくか……」

誕生日まではまだしばらく時間もある。結乃の誕生日は特に祝日というわけでもないし、一ヶ月も前から予約をしなければ入れないような高級店を選ぶつもりもなかった。

アルバイトで貯めた予算も、いくらでもとは言えないものの、学生二人が食事をするだけならば不足はしない程度には残っている。

「とりあえず、今日は帰るか」

答えを後回しにしつつも、晶は自分を納得させるようにそう呟いた。

そのときだった。

不意に、晶の視界の端に、見慣れた栗色の長髪が映った。

「っ……」

背筋を、冷たいのか、熱いのかもわからない感覚が駆け上がる。似たような髪色の女性はいくらでもいる。

それでも、晶は言葉にできない嫌な予感を感じていた。

「結乃……?」

晶の瞳が、栗髪の女性に視線を向け焦点を合わせる。見えるのは後ろ姿だった。腰の上あたりまで伸びる栗色の長髪。驚いたのは、その下の、着ている服だ。桃色と紫の中間の色味のメタリックの布地が、下品なくらいキラキラと輝いている。背中は大きく開かれて、肉感的な肢体が遠目からでも露わになっているのがわかった。

唾を飲み込もうとして、できなかった。

いつの間にか、口内は砂漠のように乾ききっていた。

晶は、結乃に黙っていたことがある。

ひとつはクォルツに身体を乗っ取られていたときの記憶。おぼろげに覚えていると晶は結乃に伝えているが、事実は異なる。

身体を乗っ取られた直後の記憶こそ曖昧だったが、結乃に告白したときのこと、はじめて肌を重ねたあの瞬間のことも、晶はすべて、鮮明に覚えていた。

晶は覚えている。

クォルツ
自分に告白されて、華やかな笑顔を浮かべる結乃の顔を。

それを向けられているのが自分ではないことにどうしようもない嫉妬と怒りを覚えながらも、自分に対して好意を抱いてくれていたことに対する安堵もあった。

晶は覚えている。

恥ずかしそうに制服をはだけ、誰にも許したことの無い花園を自分クオルツに晒した最愛の女性の痴態を。

晶は覚えている。

復讐の興奮で破裂しそうなほどに怒張した肉棒を宛がい、純潔を散らした瞬間の感触を。最愛の女性が、自分であって自分ではない存在に純潔を奪われる怒りと憎しみ、敗北感に絶望。それと同時に、生まれてはじめて味わう女性の肉の味を。

晶は覚えている。

幻魔の媚香によって痛みすら快感へと変換され、蕩けるような至福の笑みを浮かべる結乃の顔を。

晶は覚えている。

自分の顔で、自分の身体で、だけど自分ではない存在が、最愛の少女を陵辱した光景を。指一本、舌の先すらも動かすことができず、自分自身が結乃を抱くおかすのをただただ見て、聞いて、感じることにしかできなかったあの無力感を。

あるとき晶はクオルツという悪魔への怒りと嫉妬、そして結乃の心を欲する欲望を抱いていた。それこそが他ならぬクオルツの糧となって彼の者を強大化させ、結果として結乃を苦しめていたということを、クオルツと混ざり合っていた晶だけが知っている。

そして同時に、そんな激流のような感情の中に、それはしかし確かに生まれていた。そのあとで結乃に語った想いに偽りは無い。

たとえ邪悪な存在に穢されたのだとしても、結乃のことを変わらず愛し続ける覚悟が晶にはあった。

だが同時に、誰よりも間近で、最愛の女性が快楽に屈する姿を見せられた事實は、晶に倒錯した性癖を刻み込んでいた。

クオルツが晶の身体で結乃に精を注ぐのと同時に、晶自身も射精の快感を味わっていた。恋人を抱く幸福ではなく、誰よりも何よりも近い場所で、愛する女性が穢されることへの興奮の吐精だった。

あれから幾度となく、晶は夢を見ていた。

夢の中で結乃は、自分ではない男に抱かれ、自分には見せたこともないほど淫らな姿で男を誘惑し、腰を振っていた。晶はただただそれを見ていることしかできない。

朝目を覚ませば夢精をしており、学校に向かう前に朝風呂に入ることが日課にさえなっていた。結乃とも毎日、あれだけの回数肌を重ねているというのに、だ。

だが、そんなことを結乃に語れるはずがない。

結乃を抱いていると、ふと思ひ出してしまう。

自分とは違う、暴力的とすらいえる抽送を受けて、蕩けきった結乃の顔を、声を。

結乃のことを愛する気持ちはわずかほどにも揺らいでいないし、結乃のような女性が自分を愛してくれていることを幸せ者だとも思う。

だからこそ、そんな——狂った欲求は、思うことすら許せない。

そうして自分を律してきたからこそ、結乃に似た誰かを目にして、妄想は働く。

晶は結乃を信じているし、誰よりも愛している。倒錯した興奮を感じるようになったとはいえ、結乃を他人に抱かれないなどとは考えていない。

だから、仮定だ。

あれが結乃だったなら、と。そんな、ありえない仮定。

そんなはずがない。

そう思いながらも、晶の歪んだ性癖は、暗さと距離ゆえにはつきりとは判別できない女性の顔を、誰よりもよく知る顔で補完していった。

恋人の不貞を妄想し興奮する自分への罪悪感が晶の胸を締めつける。それなのに、目を逸らすことも、想像を止めることもできなかった。

男を誘うように、肉付きの良い尻を左右に振りながら、結乃は歩いていく。

距離は十メートル以上ある。感じられるはずがないのに、匂いや、声まで伝わってくるような気がした。

動悸が激しい。

心臓が急激に早鐘を打っていた。ドクンドクンドクンドクンと、全身に強引に血液を送り込んでゆく。ズボンの中で、晶自身に血液が流れ込む。痛いほどに怒張して、ズボンの布地が内側から張りつめる。

視線の先、結乃は男に声をかけられていた。晶や結乃の父親よりも、さらにひとまわり

は年上に見える中年男性。結乃はその誘いを断るでもなく受け入れる。高級そうなスーツに包まれた腕に抱き寄せられて、二人はそのままホテル街の奥へと進んでいく。

心臓が、万力で締めつけられるような激痛。だが同時に、認めることすらもおぞましい、昏い興奮が爆発的に膨らんでゆく。

晶はそれを、その場でただ見ていることしかできなかった。

無力感か、絶望か、あるいは別の何かなのか。

「くっ……」

一瞬、視界が白む。立ちくらみにも似た、しかし強烈な快感を伴う明滅。粘ついた汚濁の感触が、硬さを失ってくれない肉棒を抱き続けていた。



夢。そう、また——淫夢だ。

ぼんやりと、焦点の合わない意識のままに結乃はそう理解する。

最初の頃のような戸惑いはなかった。むしろ、これから起こる何かへの期待に、意識だけの自分にはないはずの子宮が疼きを覚えてすらいた。

次第に、自分という存在の焦点が合っていく。肉体に感覚が戻ってくる。

肌に触れる空気は、やや汗ばむ程度。雑踏の声が鼓膜を揺らす。舌に触れるのは自分の

唾液の味。口の中を舌で掻き混ぜると、興奮を示すように唾液は随分と強い粘り気を帯びていた。

視界に広がるのは、駅前の歓楽街だった。夜の街、という印象が強い方向に、結乃の足は向かっていった。

鼻腔から、夜の香りが漂う街の空気を吸い込むと、ひとときわ惹かれる匂いがあった。

結乃が視線を向けると、身なりの良い中年の男性が立っていた。

男性からの視線を感じた。舐めるような、粘性の視線。物理的な接触はまったくなく、胸を、腹のラインを、尻の曲線を、股間を、ふとももを、そしてようやく顔を。比喻ではなく、男性は結乃を見つめながら舌なめずりをした。

気付けば、結乃が着ていたのはボディコンシャスと呼ばれる衣装だった。いつからそんな服を着ていたのかはわからない。だが、この淫夢の矛盾を指摘する無意味さを結乃はもう知っていた。肌に貼りつくボディコンシャスは、結乃の肉感的な肢体を一応は隠しているものの、その色香をむしろ強調すらしていた。

「ふふっ……♡」

頬が緩み、結乃は男性に向けて微笑みかけた。結乃をよく知る者ならば、本人であるとはとても思わないであろう、艶を帯びた笑みだった。

直後、男性から漂ってくる匂いが強くなる。

牡の匂い、欲望の匂いだ。

「君が、ユナちゃんかな？」

胸を、尻を、舐めるような視線を隠そうとさえしないで、男性は結乃に声をかけてきた。不思議と、不快に感じることはなかった。それどころか、心地良くすらある。下腹が熱を持ち、キュンキュンと疼きを訴えてくる。ボディコンシヤスの裾から覗く下着には、粘性を帯びた蜜が染みを作っているのがわかった。

人違いだとは思わなかった。今回の淫夢で自分に与えられた配役が、男性相手に援助交際を行う淫乱な女の子、ユナなのだと自然と理解する。

「はい……なんででしょう？」

くすくす、と。用件など聞くまでもなくわかっているのに、ユナはあえて目を弧にして問い返す。男性はユナを抱き寄せ、太い指でボディコン越しに尻を撫ではじめる。

「あんっ……♡」

慣れた様子の手つきに、ユナは抵抗しない。この淫夢の中の自分はそうされて悦ぶ淫乱なのだから、と。押し当てられるてのひらに、ユナは抵抗するどころか、自分から尻を突き出す。そんなユナの反応に気を良くしたのか、男の指が、柔らかなユナの尻肉に食い込んで、甘い官能を送り込む。吸水力の限度を超えて、下着が蜜を滴らせる。大きく露わになったふとももに、汗ではない液体が伝っていく。

「メールのやりとりだけでもわかっていたけど、ユナちゃんは本当にスケベな娘だね」

「スケベなのはおじさまの方でしょう？　だってこんなに――」

てのひらから、そして声に乗って鼓膜へ、男の欲望の波動が流れ込んでくるのを感じる。金と立場を利用して、女性を自分の所有物にする下劣な所有欲。

怒りが湧くはずだった。大嫌いなタイプの人のはずだった。それなのに、下腹の奥が熱を持つ。その欲望を好ましく、求めているように、キュン、キュンと子宮が疼く。

この牡^{ヒト}がいい。この欲望を注^ツがりたい。

そんな欲求が、いとも簡単に男への嫌悪感を押し流す。そもそもそんなものが、結^{ムス}乃^ノの中に残っていたのかもわからないくらいに。

「いい欲望……♡」

もう我慢は長続きしそうにはなかった。ユナはいつまでもその場で尻を揉み続けてくる男の手をとり、胸を押しつけるように両腕で抱き寄せた。ボディコンシャス越しにも、男の腕の硬さが伝わってくる。つまりその逆に、男の腕にはユナの豊乳の感触が伝わっているということでもあった。豊乳が潰れ、男の腕の形に合わせて変形するほどしっかりと抱きつきながら、ユナは男の股間を確認する。父親よりも年上であるはずの男は、しかし男としての機能をちっとも衰えさせている様子はない。さほど衣類に詳しいわけではないユナの目にもはつきりとわかる高価なズボンの布地が、悲鳴を上げそうなほど内側から押し上げられていた。

「それにしても、ユナちゃん。本物は写真で見るとよりももっと可愛いねえ。それに……」
「それに……なんですか？ んっ……♡」

男の下卑た視線を受けて、ユナは腕への抱擁を強める。ぐにゆり、と淫猥に変形する豊乳から快感が伝わって、甘い声が漏れた。

「それに、想像の何倍もスケベなようだ」

抱き締めた男の腕が、ボディコンの腹に触れ、そのまま躊躇なく下って下着のクロッチに触れる。

ぐちゅうっ。

ユナの細い指よりも、誰かの指よりも、太い指が、メタリックの光沢を帯びた下着の割れ目をなぞる。強い力ではない、ショーツが含んだ愛液を、搾り出そうとするだけの動き。断じてユナを氣遣っているわけではない。ただ、自分の欲求を満たすための行為。男の指先から澱んだ欲望が流れ込み、ユナの子宮ココロに充足を与えていく。

「くあ……んっ♥ おじさましたらあ♥」

近くを歩いていた男たちは、光に寄せられる羽虫のように、ユナの媚態に劣情の視線を送っていた。甘い声に周囲の視線が集まることも、今のユナには興奮の材料以外の何でもなかった。

窮屈そうに膨らんだ質の良い布地を撫でたくなるものの、ユナは笑みを作って我慢する。理性によって欲求に打ち克ったのではなく、より強い快感に至るための、自分に対するおあずけだった。心臓が高鳴る。弓の弦を引き絞るように、快感への期待が膨らんでゆく。

「もうこんなにぐちよぐちよだ。私のような紳士オトナを誘惑するなんて、いけない娘だ」



「悪い子には、お仕置きしてくださいますか？」

「もちろんだ。子宮ココロの底まで、しっかり舐けてあげるとも」

男の指先が布地ごとユナの割れ目を押し込んだ。溢れ出した蜜が男の指を濡らし、ユナのふとももを伝ってゆく。

「あんっ……♡ おじさまの手つき、えっちすぎます♡」

男の手つきは慣れていた。女を狂わせ、快楽で操ることを繰り返してきたことが、わずかな時間だけでも伝わってくる。

「こうやって、色んな女の子のこと支配コワしてきたんですか？」

「壊しただなんて人間おんなのこきが悪いねえ。私はただ、豚おんなのこの心の底ネガイの欲求に鼻が利くだけだよ」

「じゃあ、私の欲求ネガイもわかりますか？」

ユナの問いかけに、男は再びユナを見る。舐めるような視線。心の奥まで見透かすような、捕食者の視線だった。

「君を味あじわわつつているうちに見みつつけてああげよう。ただ、今でもわかることは、ユナちゃんがもう我慢の限界なんじゃないか、ってことだね。続きはホテルで話そうか？」

男の言葉にユナは頷き、テーマパークに浮かれる子供のように夜の街を進みはじめる。

下腹の淫呪が、期待を表すように妖しく光を帯びていた。

今日もまた、淫夢を見る。

結乃はもはや日常としてそれを受け入れていた。

いつもの淫夢には導入があった。

その淫夢の世界観。自分がどんな役割で、今どんな状況なのかが真っ先に入ってくる。だが今日の淫夢は違った。

結乃は、目を覚ました。淫夢の中で目を覚ますという表現が正しいのかはわからない。少なくとも結乃の主観としてはそうだった。

結乃がいたのは見慣れた自分自身の部屋だった。母から継いだ大型の姿見に、結乃は映っていた。鏡を隔てて、隣り合った別の世界を見ているような奇妙な感覚。

鏡に映る結乃の姿は、記憶の通りの高校二年生の自分ではなかった。

子供——それも、赤ん坊なのだ。

赤ん坊、という表現がそのまま相應しい赤らんだ肌。生後数ヶ月どころか、生まれ落ちたその瞬間のよう。寝台の枕元に置いたデジタル時計が、二〇〇四年六月二十四日の午後四時を示している。結乃が生まれた日、生まれた時間。

もちろん、結乃が生まれたのは自宅ではなく病院だったし、その頃にはこの部屋は結乃の部屋ではなかった。部屋の調度は結乃が選んだものばかりで、そもそも日時を示すデジ

タル時計は、十二歳の誕生日に晶からもらった宝^{プレゼント}物だった。

だから、こんな状況は現実にはありえない。過去の記憶を思い出すのではなく、過去と今とを切り取り、貼り付けた歪なコラージュだ。

それがわかっていても、結乃にはどうすることもできない。普段の淫夢^{ユメ}の中ですら、結乃には抗うことは許されていない。まして今の結乃は比喻でもなく、本当に無力な赤子だった。声ひとつ漏らすことができないままに、淫夢^{ユメ}は進行する。

赤子の結乃の身体の下、白いシートとの隙間の影から、深い闇色のなにかが伸びてくる。磯^{イソギンチャク}巾着のそれにも似た、無数の触手だった。現実の現在^{いま}の結乃にとっては細い、しかし淫夢^{ユメ}の中の結乃にとっては凶器にも等しい太さで、先端部はエラの張った男性器にそっくりだった。

一糸纏わぬ姿の結乃を、影から伸びた触手の群れは撫ではじめる。粘りのある体液が肌を濡らす。幻魔のそれと同質の欲望の淫液は結乃の小さな身体を瞬く間に火照らせていく。

——ほしい。

まだそんな機能があるはずもないのに、幼い身体は完全に牡を求めている。

産声を上げるよりも前に、トロリと蜜が溢れ、結乃はもどかしさに身を揺らす。機械のように動くでもなく、獣のように貪るでもない。そこには明確な、邪悪で淫猥な意思を感じられた。そこには結乃の、まだかすかに残る理性を焼ききろうとするように、肌を撫で、欲求を育てていく。

結乃は縋るように手を伸ばす。産まれたばかりの子供が、親に対してそうするように。無数の触手は、いずれも違う形状カタチをしていた。どれも男性器の形状カタチであることには変わらない。しかしぼつてりと太いものや、イボのような突起があるもの、エラが強く張ったものと、一本一本がまるで違う。その中でも一本が、結乃にはどこか神々しく、輝いてすら見えた。

——結乃。

不意に頭の奥で、誰かの声が聞こえた気がした。誰かの顔が浮かんだようにも思えた。その声が、表情が、結乃を引き留めようとしているように思えた。

しかし、キュン、キュンと、子宮が触手を求めはじめた。まだどこかと繋がっているようにすら思えるヘソの下に浮かんだ卑猥な紋様が、番つがいを求める蛍のように光りは消えてを繰り返す。おぼろげに感じる呼びかけの声など簡単に掻き消された。

ほしい。ほしい。ほしい。ほしい。

あの触手チンポが、ほしい。

それが、今の結乃が最初に抱いた欲求だった。

触手は結乃の望みを叶えるように動いた。最も魅力的に見えていた触手が、結乃の割れ目に触れる。

くちゅり。

溢れた蜜が、卑猥な音を立てる。

はじめての口づけのような多幸感が結乃を満たす。だがそれに浸る間もなく、触手は結乃の内側へと挿入^はっていく。

つぶ、つぶつ、と。未通の道をたやすく拡張ながら、触手が進む。小さな身体はそれを確かな官能として受け入れた。すぐに突き当たった純潔の証が、小さな断裂音とともに裂けた。痛みではなく、官能だけが結乃の内側に拡張していく。触手は結乃を氣遣うことなく、さらなる奥へと進んでいく。

トンッ、と。未熟なはずの聖域を亀頭がノックする。

落雷に打たれたような官能の衝撃に、結乃の身体が大きく震えた。

自分が、もう一度産まれなおしたような快感。

「あ、あぁっ————」

現在の自分よりもずっと幼い、赤子の声が喉を抜ける。

生まれてはじめての吐息。それは、あまりにも艶を帯びた産声だった。

両親の声を聞くよりも先に、結乃は甘い嬌声を上げた。

だらだらと愛液を溢れさせ続ける幼腔に気を良くしたのか、触手は抽送を開始する。

ぐちゅ、ぐちゅつ、と音を立てて、肉の快感が出入りする。意味のある言葉は出ない。

喃語にも満たない甘い喘ぎだけが喉を抜けて出ていく。

ビクビクッ、と触手が脈打ち、身勝手な欲望を吐き出す。

小さな子宮^{カラダ}に収まるはずのない大量の欲望。それなのに、結乃の子宮^{ココロ}は砂漠の砂地のよ

うに、注がれる欲望をいくらでも吸い込んでゆく。

朝が来て、夜が来て、また朝が来て、夜が来る。

それが繰り返される。

ただひたすらに繰り返される。

ひと晩続き、三日続き、一週間続き、ひと月続き、半年続き、一年続いて――。

言葉も話せない赤子の身体は、どんどん大きくなっていく。

しかしそれは母の母乳や離乳食による成長ではない。無造作に口内に押し込まれる触手の先端を、尖った乳歯で傷つけないように、母の乳頭に対してそうするように、吸い付く。短い舌を鈴口に伸ばし、ちろちろとねだると、よくできましたと言わんばかりにドロリと粘りつく御褒美の栄養食^{ザイメン}が吐き出される。口腔を満たし、食道も満たし、胃の中も限界を迎えてもなお精が吐き出され、唇の隙間から溢れる。生臭い淫臭が結乃の部屋には常に充溢していた。

誰が教えてくれるわけでもなく、結乃の頭の中には言葉が浮かび、刻み込まれていく。

最初に覚えたのはチンポ。次にザーメン。そしてオマンコ。

記憶のアルバムを捲っていくように、結乃自身すら覚えていないような記憶が呼び覚まされて、二週目の人生の記憶がその真上に多層化^{レイヤード}されていく。

二歳になる頃、晶との出会いの記憶が再生された。

二週目の結乃は、両手の五指を器用に使って、二本の触手を扱きながら、口淫奉仕^{フェラチオ}を行

っていた。生まれて七百余日、一度一瞬たりとも膣道から立ち退いたことのない触手を、くいと腰を浮かせることで射精に導く。牝として未熟な子宮に精子が流し込まれ、腹部が風船のように膨れ上がる。

「ん、はあっ……♥」

注ぎ込まれた精子は、魔力となって結乃の全身に融け込んでいく。あまりにも甘美な欲望の味。

寝台の上で結乃が浮かべる笑顔は、とても二歳児とは思えない淫らな誘引だった。

舌足らずで語彙の乏しい誘惑おねだりの言葉に、触手は抽送を加速させ、さらなる欲望を注ぎ込んだ。

寝台の上に終始する世界に娯楽はなかった。否、娯楽など不要だった。

触手オチンポが膣道を行き交う快楽に勝る娯楽なんて、この世にあるはずがなかった。

三歳になる頃——一週目かに結乃が晶に好意を抱きだした頃——には、結乃の胸は乳房と呼んで差し支えのないものへと膨らみはじめていた。吸盤のような触手が乳頭に張り付いて、吸引された。吸い付かれるという官能を覚えて、何度も甘美な絶頂を迎えた。

四歳、五歳、六歳、七歳——記憶の中の結乃が晶への想いを深めていくのに同調するうちに、二週目の結乃の身体は淫らな成長を遂げていった。

小学校に入学するような年の頃、他の子供たちならばまだ男子と女子の身体的差異もつかない頃だろうに、結乃の乳房はFカップの淫乳と化していた。結乃の成長に合わせて、

結乃の膾道を占有する触手も充分な逞しさを帯びていった。

二週目の人生が十三年目に差し掛かって、結乃の服装は御珠学園中等部の制服に変わった。

「ふふっ……中学の制服……似合ってますか？」

内側から張り裂けそうなくらいに肥えた淫乳を揺らして、結乃は触手に新しい自分の姿を披露する。目などないはずの触手から、粘ついた情欲の視線を感じる。

そのことが、今の結乃にはたまらなく嬉しかった。喜びはそのまま、子宮に宿る炎に薪をくべて、その勢いを強める。布地の少ない紫のショーツには愛液が潤と染み込み、牝の匂いを強烈に放っていた。

「お願いします……♡」

結乃がねだると、まるで結乃の中学入学を祝おうとするかのように、四方八方から触手が伸び、結乃の制服に濃厚な白濁液をぶっかけた。

新品の制服が、結乃身体が、そして精神が、ドロリと粘ついた欲望に染められる。

「すごい、におい……♡ 私の制服姿で興奮してくださってるんですね♡ ああっ、イク♡ イクウツ♡」

自分自身の身体から漂う牝の精の臭気で、結乃は絶頂に達した。ただ息を吸い、吐き出すだけで興奮が快楽を生み、快楽が興奮を高めていく永久機関。来る日も、

来る日も、
来る日も、
来る日も。

ありとあらゆる官能を、結乃は貪った。

膣で、尻穴で、口腔で、乳房で、全身のすべてで快楽を味わい、与えることを知った。
一週目の人生では知らなかったような倒錯的な悦びを知った。それらはどれも嫌悪ではなく、法悦を結乃に与えた。

自分の内側^{ナカ}を満たし続ける快感を、結乃は六千日近くも飽きることなく受け入れ続けた。
二週目の人生は、そのすべてが官能とともにあった。苦悩も葛藤も、なにもない。ただ快楽に溺れるだけで、何よりも幸福^{シアワセ}だった。かつて心の大部分を占めていた何かがあった空白には、別の存在が巢食^{ネガイ}っていた。

結乃は制服のスカートの下、愛しい存在^{ヒト}の願望通りの卑猥な意匠の下着の中へと手を伸ばす。

「んっ……♡」

ぐじゅり、という淫猥な粘音が小さく響き、その快感に結乃は啼いた。

指先から伝わってくる膣道の感触は、十七年という年月を重ねて一本の肉棒^{チンポ}専用^ホに誂えられた快樂具であることを示していた。

言葉などなくとも、結乃には触手が求めることがわかるようになっていた。下腹に浮か

ぶ邪悪な呪いが欲望を伝えて疼きと変わる。求めに応じて、結乃は久しく忘れていた言葉を思い浮かべる。

——他人を助きたい。

——■■■■の隣に、胸を張って立てる人間になりたい。

かつてそう思って口にしていたその言葉が、別の願望とともに喉を抜けていく。

「カッティングアップ・エスフェール……♡」

主観にして六千日以上ぶりに口にしたその言葉に、希晶石は反応を示した。

「んふっ……♡」

澱みを蓄え、ほとんど黒にも近い艶を帯びた真珠の輝石が桃紫マゼンタの光を放つ。人の欲望を喚起する妖しげな光は、結乃の肢体を愛撫しながら覆フってゆく。制服は光へと還元され、ぴったりと肌に貼りつく白とピンクを基調とした晶コスチューム衣を形作った。

意識が浮かび上がっていく。

結エスフェール 乃は微笑む。

救いを求める誰かを安堵させるためではない。

ただ、自分の欲望が叶う悦びに。

デジタルの置き時計が時を刻んでゆく。



夕日の差し込むリリウム敷きの廊下を、気怠げに進む人影がある。

少女——と一見すると勘違いしてしまいそうなくらいに線の細い少年が、御珠学園高等部一年四組出席番号六番、久遠桂くどうけいだった。

「あーもう……失敗したなあ……」

尖らせた口元から零れる声も、知らない者が聞けば女子のそれと聞き間違える、テノールというよりソプラノの音階。

廊下の壁にかけられた時計が示す時間は十八時も近い。部活動によつてはまだ部活中で、遠くからは暑苦しいかけ声が聞こえてくるものの、部活のない生徒はほとんど下校した後だ。それゆえに廊下は、人の声こそ聞こえてきても誰かとすれ違うこともない。

桂は男子水泳部に所属しているものの、この日は部活は休みだった。にもかかわらず、こんな時間に桂がプール用の更衣室に向かっているのは、忘れ物に気付いたためだ。

憧れの先輩からもらったハンカチは、桂にとっての宝物でもある。いつも使わずに、部活用のバッグに入れて持ち運んでいるはずのそれが見当たらなかった。

職員室に届けられてもおらず、忘れたのだとすれば、他の場所は思いつかなかった。通い慣れた更衣室には、ほとんど自然と辿りついた。

桂の華奢な腕が、更衣室の分厚い扉を開けようとして、ほんのわずかに開いたところで止まった。

声がしたのだ。

遠くから聞こえる運動部の活動の声とは違う。目の前の更衣室の中から複数の、それも男女の声が聞こえてくる。

違和感がある。しかしただ違和感としか認識できないまま、桂は固まっていた。固まっ
たまま、扉の中からの声は漏れてくる。

甘い——蕩けるように甘い声。

「この声って……」

そう、いった経験を持たない桂でも、一瞬でそれが男女の情事の声だとわかった。

男女の声が混ざっているが、その数は均質ではない。一人の女性の激しい喘ぎに、無数の男たちが野次を飛ばしている様子だった。

声を聞いただけで、身体が強張るのがわかった。いかに女子のようだとからかわれる容姿であつても、桂も健全な男子高校生である。そういうことに興味がないわけもない。

無意識のうちに息を潜めて、桂は更衣室の扉を開けた。

次の瞬間、視界に飛び込んできた光景に、桂は息を止めた。

視線の先、一人の女子生徒が十人以上の男子部員に囲まれていた。

「え……?」

桂は、息をすることも忘れて、目の前の光景を見ていた。

男たちに囲まれていたのは、予想通りに一人の女子部員だった。栗色の長髪。着ている

のは、通常の水着以上に肌に貼り付き、その魅惑の造形を際立てる競泳用の水着。アスリートとして必要な筋肉がつきながらも、男好きのする肉感を帯びた肢体。

百分の一秒でも、千分の一秒でも速く。そんな願いを叶えるために作られた機能美の結晶であり、努力の結晶でもあるはずの姿はしかし、この場においてはだからこそ、下品な行為用の衣装よりもずっと淫猥に見えた。

女子部員は床に四肢を突いて、後ろから男子のモノを突き込まれていた。男子が腰を突き込むたびに、小気味良い打撃音が生じ、女子部員の喉から甘い喘ぎが溢れ出す。

それは、桂が思い描いていた男女の交合とはまるで別のものだった。

互いの愛を確かめあうための行為ではなく、男が女を、快楽を得るための道具のように使う暴力的な行為だった。

他の男子はその様子を羨ましそうに眺めながら、自分自身をしごいて順番を待っている。全員の視線が女子部員に集まっていた。異様なほどに熱の籠もった淫猥な視線。桂も、女子と勘違いされ向けられたことのある下劣な感情と方向としては同じで、しかし遙かに高粘度の感情だった。自分が見られているわけでもないのに、怖気に背筋が冷えていく。

男子部員に腰を突き込まれる女子のことを、桂は知っていた。

阿古屋結乃。女子水泳部の二年生。しかし桂にとってはただの一年上の部活の先輩というわけではない。

目の前の光景から逃避するように、桂は過去の出来事を思い出す。

もう四年も前。桂が小学生だった頃のことだ。

夏休みがはじまったばかりの、暑い日の朝だった。

友達の家遊びに行こうと気が急いていた。そのせいか、法定速度を超えていた乗用車が近づいていることに気付かず横断歩道を渡りかけて、撥ねられそうになったのだ。

そのときに、寸前のところで桂を救ってくれたのが結乃だった。

「なんで助けてくれたの？」

当時の自分が、そんな疑問を口にしたことを桂ははっきりと覚えている。

思いきり肩を掴まれ、歩道にまで引っ張られた直後、指先にサイドミラーがぶつかった。それくらいギリギリの救出だった。ひとつ間違えれば、自分まで怪我をしていたかもしれない。なかったのだから、気になって聞いたのだ。

彼女は自分の花柄のハンカチを、持っていたペットボトルに入っていた水で濡らすと、桂のジンジンと痛み続ける指先を冷やしながら語ってくれた。

「私もね、助けてもらったことがあるの。湖で溺れそうになって、そのときに助けてようとしてくれた人がいたんだ。結局一緒に溺れそうになって、近くのおじさんに助けてもらったんだけど……その人は、私のヒーローなの」

彼女はそのことを思い出しながら語って、嬉しそうにしていたことを桂は鮮明に覚えている。

「その人が助けてくれたわけじゃないのに？」

「うん。その人はね、泳げなかったんだよ？　それなのに、私のことを助けなきゃ、って思ってた……身体が勝手に動いたんだって。それを聞いて、私もそんな人になりたいなって思ったの。だから、私も困ってる人を見つけたら、できるだけのことはいしたいんだ。今だって、君のことを助けられた」

そう語る彼女の顔は、恋する乙女の顔をしていた。初恋すら経験したことなかった桂の目にも、彼女がその人に恋しているのだとわかったし、同時に桂は、彼女に初恋をした。水泳部に入部したのも、中学で再会した彼女を追ってのことだった。

彼女が幼馴染の播磨晶に恋をしているのも、その想いの強さも知っていたし、自分の初恋が実らないことがわかっていても、桂は彼女への憧れを止められなかった。

そんな彼女が今、男たちに輪姦されている。

更衣室の中は嗅ぎ慣れた塩素臭に加えて、桂自身もよく知る生臭い精の臭気が充満していた。

桂は拳を握り締める。

桂の身体は同年代の女子と大差ないほどに華奢で、ケンカは決して強くはない。

しかし、目の前で犯される初恋の女性を前に見て見ぬ振りをすることはできなかった。

——その人は、私のヒーローなの。

彼女がそう告げたように、彼女もまた、桂にとってのヒーローだった。

他の誰かに助けを求めるなどという考えは頭にはなかった。

心臓がバクバクと鳴る。部の大会に出たときよりも何倍も緊張して、口の中が乾いているのがわかった。両手、両脚が震えてそのばに膝をつきそうになる。だが、躊躇すればするほどに、彼女が犯される時間は伸びていくのだと気付けば、覚悟は決まった。

桂は大きく息を吸い込み、

「やつ、やめろっ！」

更衣室の中へと、上擦った声を響かせた。

「久遠……？」

桂に最初に気付いたのは、桂の同級生の水泳部員だった。桂とはそれなりに仲も良く、昼休みに昼食を一緒にとることも少なくない男子だ。

少しスケベなところだけには呆れていたし、女のような顔と身体つきの桂にまでセクハラじみたことを言うてくるのには辟易していたものの、基本的には良い友人であると思っていた。しかし今、友人の瞳に宿ったギラギラとした感情の炎は、彼を桂のよく知る友人とは別の生物であるように思わせた。

友人が闖入者の存在に気付くと、その場にいた、順番待ち中の男子たち全員が桂を見た。先輩も同級生も後輩もいた。よくしてくれる先輩も、可愛がっている後輩もいる。だがその全員が、友人と同じ色を瞳に宿していた。澱んだ劣情の色だ。

「あれ？ 誰か、久遠のこと誘ったのか？」

「いや、そんなことしないだろ。無駄に正義感強いし、こういうの嫌がると思って」

「じゃあ偶然？　だからちゃんと鍵閉めとけって言っただろ。バレたら大原田のヤツにブチギレられんぞ」

「キレられるだけならマシだけど使用禁止とか言われたら最悪なんだけど」
「無理無理無理無理。禁止とか絶対無理だって！」

男子部員たちは誰一人として悪びれる様子はない。それどころか、結乃を犯している男子に至っては桂の登場など意にも介さない様子で、がむしゃらに腰を振り続けていた。

一度は桂に気付いた男子部員たちも、数人はまた、犯される結乃を眺めながら性器をしごきはじめた。

異常だった。

今なお桂を見つめる男子の瞳は、桂への性欲すら含まれているように思えた。ゾクリ、と背筋を冷たいものが走る。

どんな相手にでも立ち向かおうと思っていた心がくじけてしまいそうな、舐めるような下品な視線。それが、信頼していた部活仲間から向けられることがたまらなくおぞましかった。そのおぞましが、桂の金縛りを解いた。

「結乃先輩を放せ！」

桂が意思を振り絞ってそう告げた、瞬間。

男子たちは皆、戸惑ったように首を傾げて、大笑いをした。

「な、なにがおかしい、んですか！　こんなことして、許されるわけが――」

「あのさあ、久遠。お前勘違いしてるわ」

ニヤニヤと、視姦するようないやらしい視線のまま、三年の先輩が言った。

「勘、違い……？」

勘違いをするような要素など、この場にはないはずだった。

異常な状況と、先輩からの言葉に、桂の頭は処理の限界を超えていた。

そのときだった。

「あっ！ ああっ！ 射精^でるっ！ 阿古屋あっ！ ああっ！ 孕めっ！ 孕めっ！」

結乃を犯していた二年生が、情けない声を上げながら結乃に腰を打ちつけた。

桂を含めた、更衣室にいる全員の視線が集中する。

だがそれ以上に、桂の息を止まらせたのは、それに対する結乃の反応だった。

「うんっ♥ キてっ♥ キてえっ♥ 岡野くんの欲望^{ザイメシ}、私の子宮^{オウク}に注いでえっ♥」

拒絶ではない。諦観でもない。その声音だけでも、結乃がそれを、本心で口に行っていることが桂にはわかった。そして、

ドクッ、ドクドクドクッ。

そんな、射精の音が聞こえてきそうなほどの大量の射精。結乃の美しい背筋は大きく仰け反って、官能を受け入れているのが桂の目にも明らかだった。

五秒、十秒。繋がったままだった先輩が、満足したように結乃から性器を引き抜いた。ドロリと。どれだけ大量に注がれたのかもわからない白濁が、結合部から溢れ出す。

「あんっ……♡ いっぱい、射精たねえ♡ ふふっ……♡」

どこか酩酊したような、間延びした声音のまま、結乃は振り向いた。

人違いではない。憧れ続けた彼女のことを、桂が見間違うはずもない。

溢れ、床に零れた精を、結乃は指で掬って舐めた。まるで桂に見せつけるように。自分の指をしゃぶるように舐め回し、桂に視線を向けた。

桂が知っている彼女は、こんなことをする人ではない。頭の中で何度も何度も、呪文のように繰り返しても、その艶やかな仕草から目が離せない。白濁にまみれた結合部から視線を逸らすことができない。

気付けば、桂の股間は痛いほどに張りつめていた。

「んふっ……♡ 桂君も、来たんだ？」

「ぼ、僕は、そんなんじゃない……」

「みんなあ……お願い♡」

桂の言い訳など聞こうともせず、結乃が男子部員たちに呼びかけると、先ほどまで結乃を犯していた男子も、自身の性器をしごいていた男子も含め、部屋中の全員が、統率された軍勢のように桂へと群がってくる。十人近い同性の手で、床に正座するような姿勢で取り押さえられてしまえば、非力な桂にはどれほど力を入れたところでほんのわずかに身じろぎする程度の抵抗しかできなかった。

「な、なにするんですかつ！ やめてくださいいっ！」

「怖がらなくっていいよ。桂君にも、教えてあげようと思うの。とつても——キモチイイコト」

そう言つて、結乃の瞳が桂を見つめる。

妖艶な笑みを浮かべる結乃の真珠の瞳が、光を照り返しているのではなく自ら輝いているように見えた。ぼんやりと、夜闇の中で、羽虫を惹き寄せる誘蛾灯のように。

目を離せずに見つめていると、自分が蕩けていくような感覚に陥つてゆく。意思がぼやける。頭がまわらない。焦点がずれていく。

身体に力が入らない。

「ふふっ……桂君」

気付くと、結乃は桂のすぐ近くにまで近づいていた。更衣室の中に充溢していた臭気よりも、何倍も濃密な牡の匂いが結乃から放たれていた。吐き気さえ催しそうな匂いの中で、結乃はどこか恍惚とした笑みを浮かべている。

「こっち向いて。お口を開けてね」

結乃が言ふと、桂を捕らえた男子たちがそのとおりの動きを強要する。顔を上げ、口開かされると、結乃は舌を伸ばした。唾液を纏って光沢を帯びたエロティックですらある舌から、唾液が、水飴のような糸を引いて落ちてくる。

とろおり、と。ゆっくり、時間をかけて——桂の口内に流れ込む。

結乃の唾液は、甘かった。

「あ、あ……」

意識が遠のく。身体感覚が自分のものではないように離れていく。それなのに、身体の一か所に熱が集まっていく。

「いいこと、思いついた……♥」

遠ざかっていく結乃の、見たこともないような淫靡な顔を眺めながら、桂は意識を失った。



熱い。熱い。熱い。

強烈な熱さを内側に感じて、桂は目を覚ました。

更衣室の床の上。急速に記憶が浮かび上がってくる。

忘れ物とりに更衣室を訪れたこと。

更衣室の中では乱交が行われていたこと。

その中心にいる結乃を助けようとして、捕らえられたこと。

はつきりと思い出せてしまう現実は、とても現実として受け入れられるものではなかった。

「目は覚めた？」

「結乃、先輩……」

声をかけられ、桂は真っ直ぐ視線を上げた。そこには、底知れない色香を帯びた結乃の姿があった。結乃の視線が、桂を見つめるように上下して、結乃は笑みを深くする。

「その格好、よく似合ってるよ」

言われてようやく、桂は身体を奇妙な感覚が覆っていることに気付いた。

視線を向けると、ぴったりとした布地が桂の身体を包んでいた。胸元から股間までを優雅に覆うものの正体は、桂もよく知る競泳用の水着だった。問題はそれが、女子用のものだということ。より速く泳ぐための貼りつくような布地が、桂の股間に貼りついて、激しい熱を放つ股間を強く押さえ込んでいる。当然のようにその形状は、女性用のクロッチ部分にくっきりと浮かび上がってしまったている。

「う、うわっ……な、なんでっ……こんなっ……」

女性用の水着を着ているということ自体よりも、勃起したその膨らみを、憧れの先輩に見られていることの方が、より強い羞恥の源となっていた。

「桂君は可愛いから、似合うと思ったんだ。ほら、みんなも桂君の水着姿で、あんなに興奮してるよ」

「え……?」

結乃に促され、桂は周囲に視線を向けた。意識を失う前まで、結乃を犯していた男子部員たちが、ニヤついた笑みを浮かべて桂を見ていた。女のような格好をしていることをか

らかおうとしているのとは違う。目は血走って、息は荒い。肩、胸、ヘソ、腰、足に、股間。それぞれ見ている場所は違っても、向けている視線の質は同じだった。

先ほどは結乃に向けられていた、淫欲の視線。

はあ、はあと荒い息が耳障りだった。注がれる視線はおぞましかった。

全員の股間は勢いよくそり立って、何人かは桂を見つめながらそれを擦り上げていた。「ね？ それに、桂君も興奮してるみたいだし……」

言いながら、結乃は桂の上に跨がってくる。むっちりとした肉感を帯びた柔らかい感触が桂の男の部分^{オス}を誘惑してきて、ただでさえ熱を持った股間が痛いくらいに硬直していた。

結乃の細い指が、水着の上にはっきりと浮かび上がった桂自身に触れる。貼りつくような布地は、結乃の淫靡な指の感触をほとんど減じることなく桂に伝える。

「ちよっ、結乃、先輩っ……あ、くああっ……」

強烈な快楽だった。桂も年頃の男として自慰の経験は人並みにある。しかし結乃の指遣いは、優しい刺激でありながら、自分自身でどれほど激しくしごくのよりも強烈な快感となつて桂の理性を焦がしていった。

女の子のような細い声が溢れそうになつて、桂はなんとか歯を食い縛った。

「いーち、にーい、さーん」

つう、つう、と。他の部員たちのモノと比べて、ふたまわりは小振りなそれを、結乃の指先が往復する。

「しーい、ごーおっ♥」

五回目を数える往復の瞬間、それまでとは違う弾くような刺激が与えられた。

「あっ、ああっ、だめっ、だめっ……」

桂自身がそう口にしたとおり——ダメだった。

腰の奥から、ずっと煮えていた欲望が噴き出した。

びゅっ、びゅるるっ。

水着の中に放たれた自分自身の熱が、桂の腹を熱してゆく。

目の前が真っ白に染まって、何も考えられなかった。

「あゝあ。桂君ったら、もうイッチャったんだ……♥」

結乃の嘲笑が、真っ白なままの桂の中に染み込んでくる。伸縮性に優れた生地締め付けは、圧迫の刺激を与えてくる。達したばかりの桂の性器は敏感で、そんなわずかな刺激にも過剰に反応を示してしまう。一度は萎みはじめたそれは、自分自身の身じろぎでまた硬さを取り戻してしまっていた。

「まだまだ射精したりないんだ？」

結乃は淫らな笑みを浮かべると、桂のふとももを撫で、そのまま水着に手を入れてくる。

「ひあっ、や、やめっ、らめ、れひゅ……」

これまでに感じたことのない深度の射精快感で、桂の呂律は回っていなかった。身体に力など入るはずもなく、結乃にされるがまま、桂の性器は白日に晒された。

ドロリとした自分自身のヨーグルトに濡れたそれを見て、結乃はじゅるりと舌舐めずりをしてみせた。

「桂君、童貞？ そうだね。こんなに初心で——可愛いんだもん。でも大丈夫。私に任せて。痛いコトなんてないからね。とってもキモチヨクしてあげるから」

桂の答えも待つことなく、結乃は自らの割れ目を桂の硬直に押し当ててくる。ぬちゃあつ、と。粘りの強い、熱い蜜が、結乃の蜜壺から零れて落ちてくる。

「あつ、ああつ……！」

「んふっ……桂君ったらいちいち可愛い♡」

このまま、この異常な状況に流されて、憧れの先輩を味わってしまいたい。そんな欲求は桂の中にも確かにあった。

昔から一途に、一人のことだけを想い続ける彼女に、自分の想いは届かないと思っていた。この状況は、間違ったかたちであつても、それを叶える唯一の機会だとも思った。

自分から何かをする必要はない。このまま、結乃にされるがままでいるだけで、その願望は叶えられる。股間から沸き上がる、自分が自分ではなくなるような強く醜い欲望。

桂はそれを——

「結乃先輩……やめて、ください……」

意思の力ではね除けた。

今の結乃は正常ではない。そんな結乃と、身体だけの繋がりを持つことは桂の願望では

なかった。

「へえ……桂君、まだ正気でいられるんだ？」

「なにを、言って……先輩、こんなこと、やめてください……こんなこと……間違ってる……先輩は、こんなこととする人じゃないはずですよ……！」

桂は思い出す。あの夏の日に、自分を救ってくれたヒーローのことを。

その瞳に宿っていた、一途な恋心のことを。

それを桂は、取り戻したかった。

その想いが届くことを桂は祈った。くちゅ、くちゅりと、溢れて落ちてくる結乃の蜜の誘惑に耐えながら。

だがその想いは、届かなかった。結乃の腰が下りてくる。ぐちゅり、と。結乃の割れ目が桂を捉えて、そのまま自分の内側へと桂を呑み込んでいく。

「あっ、あ、ああっ、あああっ」

すべての方向から柔らかく、熱い肉の襷に包まれる初めての経験に、桂は耐えられずに二度目の精を、憧れの先輩の内側に吐き出した。

「あはっ♥ 桂君、挿入^いただけでまたイッちゃったの？」

笑いながら、結乃の纖手が桂の薄い胸板に触れた。興奮のためか硬くなった乳首を、結乃の指が捏ねた。

「あっ♥ なっ、なにっ♥ やめっ♥」

性器への刺激は、その種類こそ違っても、桂も知る快感ではあった。しかし、乳首への刺激は違う。受けたことのなかった刺激に、桂はまた、女子のような喘ぎ声を漏らしてしまふ。結乃の内側で果てたばかりの性器も、再度硬度を取り戻していた。

「結乃、先輩……」

「ねえ、桂君？ 私が間違ってるって思うなら……どうして桂君はこんなにおちんちんを硬くしてるの？」

「そ、それは……」

「私のおまんこ、気持ちいいでしょ？」

「僕は、先輩のこと……」

「そうやって抵抗するのも可愛いけど、私は、桂君のえっちな欲望が見たいなあ」

くすくす、と。結乃が乳首を弄びながら笑うと、結乃の手の中に、野球ボールよりいくらか小さい、不気味な球体が握られていた。

「ねえ……見せて？ 桂君の心の底の——えっちな欲望」

結乃は球体を桂の胸に押しつけると、球体はまるで物理現象を無視したように桂の胸に沈んでいき——その動きが、途中で止まった。そのとき、結乃が荷物を入れていたロッカーが、眩い光を放ったようににも感じられた。球体は桂の胸から弾き出されて、パリンツ、と音を立てて碎け散った。

「今の……何……？」



その変化に気付いたのは、その場において結乃だけだった。

「守られてる……？　もしかして、この子……」

結乃が何か言っていた。しかし今の桂にはその意味は理解できなかったし、それ以上に、人の言葉を理解できるだけの知性など、とうに蕩け落ちていた。

「ふふっ……そんなこと、今はどうでもいいよね♥　ほら……イッちゃえ♥」

キュウツと。結乃の膺の締め付けが強くなる。これまでとは桁違いの快感が桂の中を駆け巡って——桂は、なにかもを結乃の内側に吐き出していた。



結乃の宝物だった置き時計は、持ち主の見る淫夢ユメとは無関係に機械的に時を刻む。七セグメントの表示が、音もなく○の表示を六つ並べる。六月二十三日が終わり、語尾の数字が四を表示する。

——平成三十一年六月二十四日零時〇分〇秒。

十七年間。再生リプレイと上書きリライトの完了を告げるように、結乃は目を覚ました。

「んっ……♥」

全身が湯船に浸かってでもいるような湿り気に包まれていた。身体中の分泌腺という分泌腺が、思いつく限りの体液を振りまいたようだった。

腹を冷やさぬようにと確かに掛けたはずの掛布団は、寝相のせいか寝台の下に押しやられていた。冷房は冷気を吐き出し続け、部屋を充分に冷やしているのに、パステルピンクの寝間着には脱水前の洗濯物のようにべっとりと汗が染み付いている。

いつもならば流したくなる肌を濡らす粘る汗が、今は不快ではない。

肌に張り付く薄い布地は身体から熱を奪っていくが、それを冷たいとは思感じなかった。腹の奥の内燃機関が燃え盛り、湯気を上げそうなほどに熱を生んでいたからだ。

シーツもまた体液で濡れていた。汗と涎と涙と蜜、小水も混じっているのだろう。どことなく便所にも似た匂いに混ざって、甘い臭気が鼻を抜ける。

ふと、結乃は夢とはなんなのか考える。

以前に本で読んだことがあった。専門家たちの中でも意見は分かれているとのことだが、主流となつてゐるのは、脳が覚醒時に得た情報を記憶の倉庫に整理する際に見る、いわば編集作業だという説。

断片的な情報と情報の間を、無意識が物語状に仕立てることで、人はそれを夢として認識する。

時計を信じるのならば、ほんの二時間ほど前の出来事が、あまりにも遠い過去に感じられた。

「私……」

夢は夢らしく、目を覚ました瞬間から離になって、心臓がひとつ鼓動を刻むたびに枝葉末節が掴めなくなる。内容を思い出せなくなるのではなく、何が現実の自分が経験したことで、何が淫夢で経験したことなのか、その区別がつかなくなる。無垢の半紙に墨汁を垂らしたように、繊維の隙間を縫って、記憶の狭間に浸み込んでいく。理性では当然のように、その区別はついている。しかし、現実以上の実感を伴った性体験は、結乃の記憶に根を張っていた。

「はあ……はあ……♡」

下腹に刻み込まれた淫猥な呪刻が光を帯びる。主観時間で十七年、一瞬たりとも欠かすことなく啞え続けてきた肉棒が、膣内を支配していない。与えられるはずの快樂もないという喪失感と飢餓感は、結乃の正気をほんの数秒で吹き飛ばした。

欲しい。

欲しい。

欲しい。

「ほしい……ほしいよ……ああ……♡」

それだけが頭を埋め尽くす。

不足を充填するため、細い腕の先に付いた五本の代用品を、肉棒を模して挿入する。にちゃあ、と水飴のような粘ついた音が漏れるほどに結乃の蜜壺は煮えていた。

「だ、め……♡ 足りないっ……♡」

指ごときで得られる快感などたかが知れていた。

結乃の影から、淫夢^{ユメ}の中と同じ形状^{カタチ}で太さを持った赤紫の触手が伸びて、淫夢^{ユメ}の中と同じように結乃の身体を貪りはじめる。寝間着の内側に触手が潜り込んでくる。結乃の弱い場所を知り尽くした、結乃の所有者がその権利を行使するとばかりに肌を撫でる。

「あ、んうっ……♡」

衣擦れと大差ない程度の刺激のはずなのに、比べものにもならないほどの快感で結乃は浅い絶頂に至った。

同時に結乃は、スマートフォンに手を伸ばしていた。

愛液の粘つく指ではタッチパネルは上手く機能しなかった。

「ああ……もう……」

苛立ちが声として溢れ出る。蕩けた嬌声とはまるで別の冷えきった声音。

細い触手が机の上に置いた指輪を結乃の手元に届けると、結乃は感謝を示すように口元に近づいた触手にキスをする。

「んっ……ちゅっ……♡ ありがとうございます……♡」

希晶石がぼんやりと輝くと、触れてもいないスマートフォンのロックが解除され、操作が進む。

そうするうちにも、結乃は火照った蜜壺をぐちゅぐちゅと音を立てて掻き混ぜて、触手

の挿入をねだる。だが触手はいつものようにすぐには結乃に挿入しない。

もどかしい。しかしそれは苛立ちではなく興奮に繋がる。空いた左の手は張りつめた乳房に向かい、寝間着パジャマの内側に潜って淫乳を揉みしだく。

スマホ画面は通話のアプリが起動され、履歴の最初にある名前を呼び出す。

あつくん、という登録名が画面上に表示され、呼び出し音が鳴る。五回もしないうちに呼び出し音は途絶え、代わりに『結乃?』という聞き慣れた、しかし久しぶりに聞くようにも思える声が返ってくる。

「あ、は……♡」

くちゅ、くちゅと、蜜壺を混ぜる官能に夢中になって、結乃は即座に返事ができなかった。今の結乃にとって、電話越しに聞こえてくる声はその程度の優先度もだった。

『結乃? 結乃っ? どうかしたのか?』

返答のないことに危機感を覚えたのか、晶の切迫した声が返ってくる。若干の音割れすらしたその声は、スマホの受話口スピーカーからだけでなく、窓の外からも聞こえてきた。

「あっ、くうん……♡」

鼓膜を揺らす恋人オスの声が、鼓膜からそのまま子宮を揺らす振動になって、身体の火照りを加速させる。

『つ……!』

受話口からは息を飲むような音だけが聞こえて途切れた。直後、窓がレールを滑る音。

続いてネコやネズミが飛び乗ったにしては重量感のありすぎる着地音が聞こえ、こつこつ、とカーテンの奥の窓が叩かれる。

結乃と晶の部屋とは、三メートルと離れていない。両家の屋根と屋根の間には五十センチほどの隙間があるだけで、子供でも飛び移れる距離だった。

小さかった頃、それなりにお転婆だった結乃も、それ以上の無鉄砲だった晶も、特に用事がなくとも屋根を伝って互いの部屋を行き来していた。当然、それぞれの親に気付かれたときには危険だと説教を受けたものの、それ以降も続けていた。

結乃にとっては、晶と共有できる秘密ができたこと自体が嬉しくもあった。

中学に上がって以降というものの、体格もよくなったこともあってめっきり使ってはいない。

両親には気付かれないようにという配慮なのか、窓を叩く音は乱暴でこそないものの、明らかに焦れているのがわかった。

結乃が頭の中に思い浮かべると、その通りに窓の鍵が開いて、窓が開く。

熱帯夜の湿った空気とともに、裸足の晶が部屋に飛び込んでくる。

「結乃っ！」

センスが良いとは言いがたいジャージで上下を揃えた晶から漂ってくるのは汗の匂い。淫夢の中で抱かれてきた牡たちと無意識に比較する。中年の男が放つ加齢臭はないものの、少し酸っぱい匂いは若々しい生命力を感じさせる。じつとりと汗をかいだ結乃の艶姿

を目にして、内心はどうあれ肉体は興奮したのか、欲の匂いが混じりはじめて、結乃は口角を上げた。

照明こそつけていないものの、窓から入り込む月光は、人の姿を映し出すのに十分な光量を持っていた。寝間着を肌に貼りつかせ、股座をまさぐりながら乳房を揉みしだき続ける結乃へと視線を向けた途端、晶から溢れ出す牡の欲求が匂いを強める。

匂いといっても五感のうちの嗅覚そのものではない。視覚とも味覚とも聴覚とも触覚とも違う。蛇が暗闇の中でも獲物を察知するために赤外線を感知できる感知器官を持つように、必要に応じて獲得した感覚。

よほど慌ててこの部屋に来たのだろう。ほんの数メートルの移動にも息を切らせた晶は二度、三度と深く呼吸し、そのたびに匂いが強くなっていく。ジャージの下で、肉棒はとつくに布地を張って硬直していた。

やってきてくれたのが、ずっと昔から恋焦がれ続け、やっと結ばれた最愛の恋人であることなど、もうどうでもよかった。

待ち望んでいた牡^{チンポ}が来た。

結乃の子宮^{ココロ}を感激で満たしたのはただそれだけの感慨だった。

「はあ……はあ……♡ あつくうん……♡」

その名を呼ぶと、吐き出した吐息の代わりに、甘い香りが肺を満たす。

もし結乃が正常な判断力を取り戻していれば、部屋に充満する甘ったるい臭気が、幻魔

の放つ淫気と同質のものであることに気付いていただろう。しかし今の結乃に正常な判断力などというものは残されていなかった。

そもそも淫気を発生させていたのは結乃自身であり、たとえそれに気付いたところで、今の結乃はそれを拒むこともなかっただろう。

不意に、窓枠がレールを滑る音。晶がそうしたわけでも、結乃が手を伸ばしたわけでもない。それを成したのは、結乃の影から伸びた不気味な触手だった。



「結乃……？ なにが、起きて……」

呆然とする晶を前にしても、結乃は自分自身を慰め続けていた。切なげというよりもただ乱暴に、滅茶苦茶に指を出し入れする。ぐちゅっ、ぐちゅっ、という下品な粘音と結乃の甘い嬌声が部屋の中に響き渡る。

月明かりに照らされた結乃の姿に、晶は完全に目を奪われていた。晶がこれまでの人生で目にしたあらゆる存在^{モノ}の中で、最も卑猥で、最も淫らな姿だった。

「ふふっ……あつくうん♥びっくりしたあ？」

甘く、間延びした声に、晶は息を飲んだ。口の中に溜まっていた唾液が喉を抜けるとき、ゴクリと大きな音を出す。普段の結乃の声色とはまるで違う。行為中、晶に対して甘えるときの声に近いが、まだ違う。まるで結乃の声帯を使って、まったく別の人間が喋っているようにすら聞こえる声だった。

目の前にいる女性モノが、本当に自分が愛した結乃ひとなのか、晶は疑問にさえ思った。

今いるのは結乃の部屋であり、容姿も、服装も、結乃以外の何者でもないというのに。晶は、誰よりも結乃を見てきたという自負があった。それこそ、両親よりも長く想ってきたし、想われていたことも知った。そんな晶だからこそ違和感は膨らんでいく。

室内の空気は甘ったるい。それが結乃メスの匂いであることは晶にも理解できた。温水の中にいるような生温かさを持つ、粘ついた空気感。

寝る前にタイマーを設定していたのだろう。エアコンは切れてこそいるものの、室温は熱帯夜の外どころか、扇風機をつけたままの晶の部屋よりもまだ涼しい。それなのに、晶の身体の熱は収まるどころか増していき、血液が沸騰する錯覚すらする。外気の熱ではなく、晶自身の身体の奥から生まれ続ける熱だった。ジャージの下、肉棒は今にも暴発しそうなほどに張りつめて、限界以上に海綿体に流れ込もうとする血流は痛みさえ訴えてくる。玉袋の内側ではぐつぐつと煮え滾った欲求が、牝に己の所有権を刻み込むための子種を増産していくのがわかる。

恋人としてではなく、愛を確かめるためにではなく、乱暴にあの媚肉を貪りたいという

欲求が膨張する。脳裏には先日、ホテル街近くで見かけた女性の姿が蘇った。倒錯と背徳の興奮が欲求をさらに肥大させる。明らかな異常事態だというのに、これまで感じたことがないほどに、結乃^{メス}が欲^くし^{いた}かった。

以前結乃にも語ったが、晶にも人並みの性欲はある。

結乃を好きになったのはそんな不純なものではないが、結乃に性的な魅力を強く感じていることを否定するつもりもなかった。

同年代を比べても明らかに豊満な胸元、肉感的な曲線を描く臀部、それでいてその両者を結ぶ腰は引き締まってくびれて、そのどちらをも強調している。艶やかな栗色の長髪に、真珠のような真ん丸の瞳。健全な男子高校生である晶が、結乃に対して性欲を抱かないはずがない。

「ねえ……あつくん……♥ あつくんのチンポ、ちようだい♥」

結乃はゆっくりと立ち上がると、そのまま晶を自身の寝台に押し倒す。寝間着のズボンを下着もろとも脱ぎ捨てて、ぐっちよりと濡れた割れ目を晶のジャージの膨らんだ場所へと押し当ててくる。溢れ出した愛液が、ジャージの布地に染み込んで、晶自身の硬直したモノにまで届く。自分の理性が蕩けていく音を晶は聞いていた。

希晶石が光を放つ。晶が知る希晶石の輝きとは違う。妖しく、ただ見ているだけで心の底から澱んだ感情が引き出されるような誘蛾灯の輝きだった。下半身を覆っていたズボンも下着も、結乃が変身するときと同じように光へと還元されて消える。邪魔だった布地が

なくなると、怒張した肉棒はそのまま結乃の入口を割り入った。

ぐちゅりっ。

水飴のように粘ついた愛液を押しつけながら、晶は結乃に呑み込まれていく。

「んっ……♡ あっくんのチンポ、きたあ……♡」

「く、あ……なん、だ、これっ……」

眼球の奥で火花が散るような快感に、晶は歯を食い縛って耐えようとする。もう日付が変わって昨日になっていているとはいえ、ほんの数時間前に結乃としたときとは明らかに違う暴力的なまでの官能だった。

「ふふっ……♡ あっくんのチンポ、ガチガチだよ♡ 気持ちいいでしょ？ いっぱい教えていただいたもん」

快楽電流の火花が散って、結乃の言葉が頭に入ってこない。その言葉に向き合わなければならぬと理性は告げているのに、目を逸らそうとする自分もいた。

「それじゃあ……動くね♡」

「待っ……」

制止しようとする晶の言葉を、結乃は聞き入れず腰を上げる。根元まで咥え込んだ肉棒の表面すべてが卑猥な肉襞によって愛撫を受ける。

あまりにも強烈な快感に、晶は射精を予感した。射精しないはずがないほどの激烈な快感だった。しかし、そのときはいつまで経っても訪れない。

「ダメよ、あつくん♥」

結乃の言葉は、語調こそ優しげだったものの、絶対的な命令として魂に刻まれるような感覚があった。

結乃は肉棒が抜け落ちるギリギリのところまで引き抜くと、体重をかけて再度一息に根元までを呑み込む。ぶちゅうっ、と愛液が飛沫を上げ、晶の顔にまで届く。

一度のストロークの、ほんの一瞬の間にも、何度も果ててしまいそうな快感。いつもならは一瞬で通り過ぎる絶頂以上の快感が肉棒全体を包み続ける。

「んふっ……♥ あつくん……気持ちいい？」

恋人の、自分にだけ見せてくれる淫らな側面。普段ならば、それだけで嬉しいことのはずだった。しかし今、晶を満たしているのは射精のできないもどかしさと、恋人の変貌ぶりへの恐怖だった。首を横にも縦にも振れずにいる晶を無視して、結乃は抽送を繰り返す。膣の最奥まで肉の棒を叩き込み、引き抜いてを繰り返す。

「もう……あつくん……♥」

結乃はもどかしそうに身体的位置や重心を調整し、より深く、より強く繋がろうとする。まるで、そうまるで——クオルツとの交合セックスを疑似的に再現するかのように。

それに気付くと、晶の背筋を猛烈な寒気が駆け抜けていった。身体は蕩けてしまいそうなほどに熱いのに、背筋を抜ける感覚だけはどこまでも冷たい。

今、晶は結乃と誰よりも近い場所にいます。肌を重ねている。結乃の身体は淫魔サキユバスのよう

に晶の精をねだり、搾り取ろうと抱き締めてきている。しかしそれは晶を見てはいない。今の結乃は晶の肉体にクオルツの名残を探しているようにすら感じた。

「あつくんっ♥ あつくうんっ♥」

結乃が甘い声音で自分の名を呼んでくるのを聞きながら、晶の胸は軋みを上げる。熱く、蕩けた声で呼んでくれているはずなのに、結乃が自分を見ていないことがわかるのだ。誰よりも結乃を見てきたからこそ、わかってしまう。

それでも、無力感と絶望と、怒りと嫉妬と、その他にも混ざり合った無秩序な感情のまま、晶の身体は結乃を貪った。

腰を、暴力的なほどに力強く押しつけると、すっかり降りてきた子宮の入口が亀頭にきゆう、と吸いついてくるような感覚があった。

「あつくんの欲望^{ザイメン}、私の子宮^{ナカ}に注いでえ……♥」

結乃がそうねだった瞬間、晶の内側でカチリと歯車が噛み合ったような感覚があった。それまで射精せずにいたことが不自然なくらいの快感の只中にあった脳が、主人の号令を受けた忠犬のようにその懇願に応えた。

先ほどから続いていた眼底で弾ける快感の火花が何倍にも強くなり、脳細胞が焼きつく錯覚すら抱く。

「あ、ぐ、あ、ああああああつ——！」

獣じみた声を上げながら、晶は煮え滾る欲望を結乃の奥へと解き放った。

どくっ！ どくとくどくとくうっ！

股間に心臓が移動したかのように、何度も何度も肉棒が脈を打ち、精液を送り込む。先ほどまでの、規格外の快感ですらまだ序の口でしかなかった。何もかもが蕩けて堕ちていきそうな、言葉にもできない快感。射精をしている最中にも、精巢が限界を超えて稼働し、一匹でも多くの種を注ぎ込もうとしていた。

「あぁっ♡ あっくんの欲望ザイメンキてるうっ♡ イクッ♡ イクイクイクウウッ♡」
絶頂への到達を宣言する結乃の声の直後、膣の締め付けがさらに強まった。

どくどくっ！ どくどくっ！ どくどくどくっ！

続く。続く。普段ならば一瞬、長くても数秒で終わるはずの吐精が終わらない。性器が脈打ったびに目の前が白くちらつく。

世界から色が消え、音が消え、残るのは射精の快感だけだった。

どれだけその至福の時間が続いたのかわからなかった。ただ、終わりの時間は訪れた。浮かび上がっていたような身体感覚が、ゆっくりと戻ってくる。

普段の射精量など比にもならない。一度の射精量どころか、一日の射精量の何十倍もの精をたった一度で吐き出したような感覚。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

虚脱感。

あまりの疲労に、晶は息を荒げた。行為そのものも充分すぎるほどに激しかったが、そ

れだけでは説明のつかない、異様なほどの疲労だった。全身のエネルギーというエネルギーが、すべて精子を増産するためにまわされ、搾り尽くされたようだった。

「結乃……お前……どうしたんだ？ 何があったんだよ？」

一度精を放ったことで、蕩けていた晶の理性は、風前の灯火程度には蘇っていた。

今この瞬間も、結乃の膣道は晶の肉棒に媚びるように抱きついてきている。萎える暇もなく、肉棒は今までで一番というほどに硬く怒張しているのがわかった。

このまま、結乃の変容を無視して、淫猥な牝肉をしゃぶりつくしたいという欲求はある。ほんのわずかにでも気を緩めれば、その誘惑に負けてしまいそうなほどに。

それでも、晶の中の結乃を想う気持ちが、晶の理性を保たせた。

振り絞った理性で、晶は自分自身を結乃から引き抜く。絡みついてくる肉襪の誘惑に、一瞬で幾度も屈しそうになるものの、晶はそれをやり抜いた。

「あんっ……♡」

ドロリ、と。晶が注ぎ込んだ大量の白濁が、結乃の割れ目から溢れ出す。

結乃もまた、絶頂に至っていくらか落ち着いたのか、息遣いは安定し、狂ったように腰を振り出すこともなかった。その代わりに、

「カッティングアップ・エスフェール……♡」

艶を帯びた唇の隙間から、結乃は変身の起句を口にする。

すっかり昏い光沢を帯びた真珠の希晶石は、それでも結乃の想いに反応した。寝間着は

黒紫の光となって還元されて、結乃の裸体を覆っていく。

人々に希望をもたらず正義のヒロイン。その変身の過程とは到底思えるものではなかった。禍々しく、淫靡なオーラを放つエスフェールの姿に、晶は沸き上がる欲望を辛うじて抑えこむ。

「私ね……淫夢を見たの」

「夢……？」

結乃の言葉に、晶は目を丸くする。結乃の唐突な告白は、自分の問いかけに対する答えとは思えなかった。しかし結乃はまるで、子を宿した妊婦のように、母性を帯びた笑みを浮かべて、結乃は呪印の刻まれた下腹を撫でる。

「そう……えっちな……とつてもえっちな、淫夢。幻魔に負けて犯される淫夢。先生とか、クラスみんなに輪姦される淫夢。それだけじゃないよ。ゲームの中みたいな世界で娼婦になる淫夢。SF映画みたいな世界で異星人に犯される淫夢。起きたらどんな淫夢を見たのかはほとんど忘れちゃうんだけど、えっちな淫夢を見てたってことだけは覚えてて、下着も、シーツも、ぐちょぐちょになってるの」

おぞましいはずの陵辱の記憶を振り返りながら、しかし結乃の声音は弾んでいた。そのことが晶には恐ろしかった。

口の中は、魅力的な牝を前にして唾液でいっぱいになっているはずなのに、喉はカラカラに渴いていくような奇妙な感覚。

「ひと晩に何回も、何十回も、何百回も、淫夢を見たんだ。淫夢をみるたび、自分がどんなえっちになっっていくのがわかったの。怖かった。自分が、自分じゃないものに塗り潰されていくみたいで」

「そんな……」

そんなこと、一度も聞いていなかった。

結乃が不安を抱えていることはわかっていたが、それは調教の後遺症への罪悪感だと思っていた。

「そうやって淫夢を見てるうちにだんだん、今自分がいるのが淫夢なのか現実なのか、わからなくなっていったの」

言葉の意味はわかる。しかし、結乃が何を言いたいのか、晶にはまるでわからなかった。「あつくん、覚えてる？ はじめてデートに行った日のこと」

「そりゃ、覚えてるに決まってるだろ」

突然の話題の転換に、晶は呆氣にとられつつも、その日のことはすぐに思い当たった。家が隣同士だというのにわざわざ駅前で待ち合わせをして、二人で昼食をして、駅前をぶらついた。

「あつくん、あの時計もプレゼントしてくれたよね」

結乃の視線が向かう先には、初デートの思い出にと晶がプレゼントした置き時計があった。最初はアクセサリのたぐいにしようかとも思ったが、それは誕生日にプレゼントした

かったから避けたのだ。

高級なレストランで食事をしたわけではないし、言葉にしてしまえば特別な何かがあったわけではない。学生同士の、ごく平凡なデートだったと晶は思う。

ただひとつ、平凡でなかったことがあるとすれば――

「幻魔が出たって……言ってたよな」

「うん」

昼食を終え、何をプレゼントしようかと街を歩いていたときに、結乃は幻魔の出現を感じとった。

結乃はエスフェールとしてその場に向かい、幻魔を浄化した。そう晶は聞いている。

「思い出したの」

何を思い出したというのか。問おうとして、喉が詰まった。

そんな晶を見て、結乃はくすりと微笑んで、無言の問いに答える。

「私、あの日……お昼に入ったレストランで、あの幻魔になった人に会ってたの。レストランの……トイレで」

晶もまた思い出す。あの日、結乃はトイレが長かった。

どこか落ち着きがなかった結乃が長いトイレから戻ってきたときには落ち着いていた。それを晶は便意によるものだと思っていたが、結乃の言葉を考慮すれば、それはまるで違う可能性を帯びていた。考えるのが恐ろしくて、晶は思考を止める。止めなければ、心が

壊れてしまうと本能が理解していた。

「私ね。あのおじさんとえっちしてたの」

しかし結乃の言葉は淀みなく続けられ、そんな逃避を許さない。その語調に罪悪感を感じられず、どこかうつとりとすらしていた。

「子宮がどうしようもなく疼いて、しょうがなくって、トイレでオナニーしてたの」
「なん——」

なんで言ってくれなかったのか、と言い終わるより早く、結乃は首を振った。

「あつくんに、デート中にまで発情する淫乱だなんて思われなくなかった。はじめてのデートで、本当に嬉しかった。楽しかった。それで、なんとか収めたくって。だけど、そこにおじさんが入ってきたの。おじさんが、オナニーしてる私を見て、おじさんからすごくいい、欲望の匂いがしたんだ。その欲望を感じたら、なんにも考えられなくなってしまう……淫夢なのか、現実なのか、なんにもわからなくなっ、目の前のおじさん^チとえっちするところしか考えられなかった」

とりとめのない言葉を漏らしながら、結乃の頬は緩んでいた。

「最初は躊躇してたけど、ちよつと淫気を注いであげたら、目を血走らせて襲ってきたの。おじさん^{ザイメン}ったらね、十年以上ぶりだって言ってたよ。娘より若いってはりきってた。でも、一回射精しただけで満足しちゃって。たったそれだけじゃ全然足りないのね。もっと、この人の欲望が欲しい。そう思って気付いたら、私の手の中には幻魔の核があったの」

「なっ……」

結乃の恐ろしい告白に、一瞬、晶の息が止まった。

「それを植えつけてあげたら、おじさんったら元気になって、たっぷり欲望^{ザーメン}注いでくれたんだ……♡」

そう告げた結乃の身体がビクンッ、と小さく跳ねる。キュウキュウと膣が蠢き肉棒に吸いついてきて、結乃が絶頂を迎えたのだと晶は悟った。

「そのときのことは、トイレを出たらもう忘れてた。うつすら残った記憶で、また淫夢^{ユメ}を見たんだと思ってた。だけど、さっき思い出したの。あれは、淫夢^{ユメ}じゃなくて、現実だったって」

結乃の不貞を咎めるつもりなど晶にはない。

クオルツによる快樂調教の後遺症は晶も重々承知している。それを満たすことのできなかった自分の落ち度だと晶は思う。しかし今、結乃が語った事実はそんな次元の話ではなかった。

「ねえ、あつくん。気付いてる？」

結乃は身体を倒し、胸を押しつけてくる。晶が知るそれよりも、さらにひとまわり以上膨らんだように思える柔肉の感触が晶の欲望を喚起する。しかしそれに晶は屈しない。

唇を噛みしめ、理性を保つ。今ここで自分が流されれば、もう自分の知っている、自分の愛する阿古屋結乃はいなくなってしまうのが本能で理解できたから。

そんな晶を嘲笑うように、結乃はクスリと笑みを漏らした。甘く、熱い吐息が晶の耳に吹きかけられる。普段ならばそれだけで射精していてもおかしくなかった。しかし今、結乃の許しが必要であればそれすらもできない。頭がおかしくなりそうな快感に焼かれながら、晶は結乃への想いを胸に踏み止まる。結乃はそのまま、晶の耳元で、囁く。

「私が——他の人^{オス}に抱かれてるって聞いてから、あっくんのチンポ、すっごく硬くなってるよ」

晶は何も言えなかった。

欲望を嗅ぎ分けるようになった結乃の前で、晶の昏い欲求を隠せるはずもなかった。

「ねえ、あっくん。自分のしたいことを、したいままにするのってこんなに気持ちいいんだね」

他者を顧みる事なく、己の欲望を満たす。

その行動原理を持つものを、晶は知っている。

「そ、れじゃ……それじゃ、まるで——」

そこまで言って、晶の舌が止まった。知っているからこそ、その言葉を口にすることはできなかった。

口にしてしまえば、取り返しのないことになる、晶の本能が理解していた。

「まるで——幻魔みたい？」

しかし、晶が恐れた言葉の続きを、結乃は躊躇することなく口にした。

頷くことも、否定することもできずただ凍りつく晶に、結乃は微笑みかけてくる。その笑みはあまりに妖艶で、晶はごくりと生唾を呑み込む。

「あつくん」

結乃の呼びかけに、晶は答えるのが怖かった。答えて、今度はどんな事実を突きつけられるのが恐ろしくて恐ろしくてたまらなかった。

それでも、晶は結乃を見た。快樂に揺れる、淫魔の瞳を見つめ返す。

「なん、だ……？」

[illegible]

「俺が……？ 結乃を、守った……？」

結乃の言葉に、晶は心当たりがなかった。

もちろん、結乃のことは大事にしてきたつもりだった。

しかし晶は、恋人だというのに、誰よりも近くで見えてきたはずなのに、結乃が淫夢^{ユメ}に苦しんでいることにまるで気付かず^{ユメ}にいた。そんな自分が、結乃を守っていたとは到底思えなかった。

「淫夢^{ユメ}の中で、決められた筋書き^{シナリオ}どおりに快樂に負けて、堕ちていくことを選んでしまつても、目を覚まして、あつくんのことを想ったら、大丈夫だった。あつくんが私の記憶の中にいてくれたから、私は自分を見失わずにいられた」

一瞬、晶は結乃が正気を取り戻したのかと思った。

たとえば誰に穢されようと、たとえどんな悪行を重ねたとしても、晶にとって、結乃は誰よりも大切な、最愛の女性であることに変わりない。そんな想いを込めて、晶は結乃の名を呼ぼうとした。

「ゆ——」

「あつくん」

だがそれを遮ったのは、結乃だった。

視線が重なる。

互いに目を逸らすことなく見つめ合う。

結乃の瞳にあったのは、燃え盛る情欲の炎だった。浮かべる笑みは、晶の知る、心優しい少女の名残もない。見る者を獣欲に溺れさせる、淫魔の笑み。

「あつくんじゃ、ダメなの」

その言葉に、晶の心は砕けた。

結乃が晶を想ってあらゆる苦難に耐えてきたのと同じように、晶もまた、結乃を想うことですべてに耐えていたからだ。

それほどまでに想う相手からの、拒絶。

「欲望が、欲しいの。強い、歪んだ、醜い欲望。それを注がれると、とつても満たされるの」

ああ、と。結乃は自らの淫乳を抱き寄せて、その身を震わせる。

晶は動けない。淫欲の炎を宿す結乃の瞳から離すこともできない。

「ふふっ……♡」

結乃が再び、ゆっくりと腰を揺らしはじめる。

先ほどをも超える快感と幸福感が晶を支配する。愛情という感情と、動物としての原始的な欲求——生殖欲との区別が付かなくなっていく。

「淫夢を見たの」

先ほどと同じ言葉を、結乃は口にする。

何かを言えるだけの気力は、もはや晶には残っていないかった。

「人生を、やりなおす淫夢^{ユメ}。気がつくと、私は生まれたばかりの赤ちゃんだった。淫夢^{ユメ}の中で、私はずっと犯されたんだ。家族にも、友達にも——あつくんにも出会うことなく、この部屋の中で、今日までの十七年間、ずっと、ずっと」

「そんな、こと……」

「辛いなんて思わなかったよ。だって、それしか知らないから。身体も、心も、どんなえっちなことを覚えていった。ぼんやりと浮かんでくる一週目の人生の記憶が、快樂の記憶でどんどん上書きされていって——」

——耐えられなかった。

結乃は自嘲するようにそう告げた。

「あつくんがいたから、私は耐えられた。だけどね——あつくんと出会うことができなかった私には、あんなの耐えられなかった。気持ちいいことだけが、私の全部になって、私を満たしてくれるのは——御主人様だけだった」

「御主人様、って……一体……アイツは、クオルツは、もういないはずだろ！」

そう。クオルツはもういない。結乃が、その意思を振り絞って、自らの犠牲も厭わずに封印したはずだ。調教の後遺症は未だに結乃を苛んでいるものの、クオルツという存在自体はこの世から消滅したはずだった。

その問いに、結乃は曖昧に微笑むだけだった。

強く、強く、強く。血が出るほどに強く握り締めた手の中に、硬い感触があることを晶

は思い出した。

結乃からの着信があつて、慌てて飛び出してくるときに咄嗟に掴んだものが、そこにはあつた。

「結乃」

汗に濡れた手を開き、晶はそれを結乃に差し出す。

それは、指輪だった。結乃の姓と同じ、阿古屋^{アゴヤガイ}貝の螺鈿^{らでん}細工が施された銀の指輪。

「これ……は……？」

結乃の瞳、快楽を宿した水面が揺れた。

指輪は、晶が結乃の誕生日プレゼントのために用意したものだった。

「ホントはさ、今年の誕生日に告白しようと思つてたんだ。これを、プレゼントしてさ」

晶は言いながら、頭を掻く。考えてみれば恥ずかしい考えだ。

希晶石の指輪を渡したときにはまだ、指輪をプレゼントするということの意味を深くは理解していなかった。しかしこの歳になればその意味もわかる。わかつていて、晶は指輪を選んだ。たとえどれだけ恥ずかしい考えであっても、その想いを伝えようと思つた。

「あつ……くん……」

結乃の瞳が揺れ動く。

先ほどまでの、快楽一色に染まった淫魔の瞳ではなかった。

快楽に蕩けた意思の中に、晶のよく知る阿古屋結乃が確かに残つていた。

「俺にできることなら、なんだってする。お前が罪を背負っちゃったっていうなら、俺も一緒に背負う。一緒に償う。だから……だから、戻ってきてくれ、結乃」

「あっくん……」

差し出した螺鈿の指輪を、結乃はおそろおそろする手にする。

「じゃあ……あっくんの全部、私にちょうだい♥」

「ああ……もちろん……！」

結乃の言葉に、晶は躊躇なく頷いた。

真珠の歯が噛み締められ、綻んだ頬が邪悪な三日月を象る。

あまりにも美しく、あまりにも淫靡な笑み。

晶から受け取った螺鈿の指輪を、結乃は指先でぐにやりと歪めた。

「私ね。あっくんのこと、本当に、本当に——」

——大好きだったよ。

それが、播磨晶という人間が、人間らしい理性をもって知覚できた最後だった。

媚声の振動が伝わって、鼓膜が液状化していくような、自分自身が融けていく感覚。目の前が、赤とも紫とも黒ともつかない色に染まっていく。

激しい打擲音が結乃の部屋に響き渡る。

その姿を蠟螂カマキリのオスのようだと結乃は思う。番つがいの中に種を注ぎ、役目を終えれば妻メスの養分にされる運命と知りながら晶は腰を打ちつける。

その動きは、理性ある人間が誰よりも愛しい相手にするものではなかった。一滴でも多く遺伝子を吐き出そうとする、必死で暴力的な突き上げ。

「んっ♥ あっ♥ イイツ♥ あっくんっ♥ ああんうっ♥」

ひと突きされるたびに、逞しく怒張した肉の槍が結乃の子宮を叩き、子宮が身体ごと浮き上がる。

「これっ♥ これえっ♥」

ようやく得られた充足の感覚に、結乃は甘く満たされた嬌声を漏らす。

晶は結乃を想ってくれていた。その想いは献身的で、一人の女性オンナとして間違ひなく幸せだった。

しかし、ダメだった。魂に刻み込まれた淫らな経験は、結乃を一人の女性オンナではなく、一匹の女性メスに変えていたから。

結乃が求めていたのは、獸欲。相手を氣遣う心のない、自分だけの快樂を追求する浅ましい欲望を注がれることだけが、今の結乃を満たすことができた。

理性を融かし、思いやる心を消し去った今、晶はその肉体をもつて結乃を充分に満たしていた。どこか皮肉にすら感じるその現実よりも、結乃は目の前の官能を貪っていく。

乱暴に自分を出入りしていく肉棒の感触を味わう。

自分の純潔^{ハジメテ}を奪った肉棒^{チンポ}が、自分を満たしているという事実^{コト}に、結乃は恍惚の笑みを浮かべる。あの淫夢^{ユメ}の中で、結乃を満たし続けていた肉棒に酷似した、しかしそれとは違うもの。

今の結乃には、自分を完全に満たしてくれる正解^{こたえ}がなんなのかわかっていた。

この肉棒^{チンポ}でこれだけ満たされるのならば、正解^{こたえ}を味わったときに、どれほど満たしてくれるのだろうか。

天井も底もなく、無限に膨らみ続けていく欲求が、満たされる刹那にも切ない渴きを結乃に与える。

もつと。

もつと。

もつと。

ただただ結乃は欲望^{ネガイ}を想う。

希晶石が、もはや黒に近い輝きを放ち、晶の肉体に絡みついていく。

優しさも、誠実さも、正義感も、結乃への愛情すらも全部——獸欲に変換する。グツグツと精巢が煮え立ち、欲望を増産していく。玉袋が水風船のように目に見えて重量感を増していくのがわかる。内側に蓄えられていくのは、愛する者との子みらいを作るための希望ではなく、今この瞬間、注ぎ込んだ相手を征服し、支配するための欲望の塊。

結乃っ！　結乃っ！　結乃っ！
結乃っ！　結乃っ！　結乃っ！
結乃っ！　結乃っ！　結乃っ！
結乃っ！　結乃っ！　結乃っ！

壊れたテープレコーダーのように結乃を呼びながら、晶は獣性を打ちつける。平手で打たれるような打擲の衝撃が、抽送のたびに強くなる。

「あ、ああ、ああああああ、射精るっ、射精すぞっ、結乃おっ！」
理性による言葉ではなく、脳に残された反射のような行動として、晶は叫んだ。

これまでよりもさらに強く、深く、晶は結乃を突き上げる。下りきっていた子宮の入口が殴打されるような衝撃で、結乃は絶頂に達しながら亀頭を咥え込む。

ほんの一滴でも余すことなく——晶の全部を受け止めるために。

「いいよ……あつくくん……♡
射精^だしてえ……あつくくんの……全部う♡」

ドクッ！ ドクドクッ！ ドクドクドクドクウッ！

直後、晶は混じり気のない獸欲を結乃の子宮オクへと吐き出していく。破裂しそうなほどに張りつめた玉袋の内側から、限界を超えて怒張した肉棒を通して、欲望が注がれる。

先ほどの射精量とは桁違いの量と勢いに、結乃は全身を痙攣させながら絶頂を迎える。送り込まれてくる獣欲の味は、これまで味わってきたどんな男のものよりも遙かに濃厚で芳醇だった。

「あゝゝゝゝゝつ♡
あつくんの、全部♡
キてるうつ♡
あひゆうつ♡
いひいつ

ドクドクドクッ！　びゅるるっ、どぴゅるるるるうっ！

晶のすべてが溶け込んだもので、結乃の子宮ココロは満たされてゆく。

それは、結乃の十七年の人生の中で最高の瞬間だった。

圧倒的な快感に、絶頂しながらさらなる絶頂に達する結乃。

下腹に浮かんだ淫猥な紋様が、歡喜を示すように煌々と輝く。

絶頂の只中で、結乃の腹部は急激な膨張をはじめ。それが不思議ではないと思えるほどの射精量だったが、それでも異様な変化だった。ものの数秒で、結乃の腹は臨月の妊婦を思わせる大きさにまで膨らんだ。

その一方で、猛烈な勢いの射精を続ける晶の肉体に変化が生まれていた。頬はこけ、肉がそげ落ち、肌は老人のように皺を刻んでゆく。

精氣を失う、という言葉が最も相応しい変化だった。全身の精氣という精氣が、精を吐き出すための場所へと集約され、集められたそばから吸い上げられていく。喉の奥からは苦鳴にすらならない息の音だけが溢れても、結乃は吸精をやめようとはしなかった。

長いようで、ほんの刹那のようでもあった、至福の時間が終わる。
希晶石から生まれた黒の光が晶を動かそうとしても、もう動かない。
到底十代も半ばの男のものとは思えない、木乃伊^{ミイラ}のように干涸らびた亡骸だけが残されていた。

「あつくん……」

思わず結乃は、その名を呼んだ。

哀しみの感情など残っていないはずだった。

今はただただ、幸福^{シアワセ}なはずだった。

それなのに何故か——涙が溢れた。

それは、結乃の中に残っていた、晶への想いの最後の欠片だったのかもしれない。

それが目元から零れて、床に落ちると、もう結乃の中に、かつての恋人への慕情は残されてはいなかった。

「アハッ♥」

笑みが零れる。今まで出したことのない軽薄な笑いが、感情の残滓を一緒になって吐き出させた。あとにはもう——底なしの欲求だけが残っていた。

快樂の余韻があった。

このままずっと、ずっと——朽ち果ててしまいうまで浸っていたいとすら思える余韻。
しかしそれを、結乃の身体は許さなかった。もっと、もっと、もっとと、貪欲に貪欲に

快樂を求める。

下腹に刻まれた邪淫の刻印が煌々と、心臓の鼓動にも似たりズムで明滅する。胎の底から伝わってくる意思に結乃はこくんと頷いた。

「んっ……♡」

甘い声を漏らしながら、結乃は膣内を満たす肉棒を引き抜いた。子宮に流れ込み欲望のエネルギーとして還元された精液は溢れることなく、代わりにドロリとした愛液が結合部からこぼれ落ちる。

まるで百年以上の時を生きたように生気を失った晶の遺骸は、しかしその性器だけは変わることなく若々しく怒張したままだった。

引き抜いたばかりだというのに、その芳醇な味、わいを思い出し、結乃は浅い絶頂にすら達する。

「あ……ああ……♡」

結乃の指は、晶が抜け落ち、喪失感を抱く割れ目に向かった。人差し指と中指を束ねて、ぐちゅり。

ほぐれきった膣道をぐちゅぐちゅと掻き混ぜると、淫猥に変化した結乃の身体はいともたやすく絶頂に至った。だが、もっと、もっと、もっと——魂の奥から響く欲望に従って、結乃は自慰を続ける。

「ん、く、う、あっ——♡」

下品な淫音を響かせながら、結乃は腹に力を込める。下腹の紋様がひとときわ強く光を放ち、それは子宮から、産道へと下っていった。本来あるはずの苦痛はなかった。かわりに圧倒的な快感が結乃の視界を焦がしていく。

この世に生まれ落ちようとする愛おしいそれを、結乃の肉壁は愛撫し祝福する。牡チンポに對してそうしてきたのと同じ、淫らな抱擁。

「あ、んううつ♡生まれ、るうつ……♡」

甘い絶頂を連続させながら、入口を掻き混ぜていた指で、結乃は自らの入口を拡張、力む。内側からの異物に拡張されたそれは黒く、光沢を帯びていた。

「んあああああつ♡」

さらに強く、力を込めると、強烈な絶頂感とともに、それはこの世に生まれ出でた。

人の目で見た限りはほぼ真球といえる形状。月の光を反射するのではなく、光も闇も呑み込むような、欲望の輝き。赤ん坊の頭ほどの大きさのそれは、巨大な黒真珠ブラックパールだった。

真珠は、宝石として数えられるものの中で、数少ない生物の産出物だ。

阿古屋貝をはじめとした一部の二枚貝が、体内の不純物をカルシウム層が包むことで生み出される自然の奇跡。

結乃が生み出したものは、まさしくそれだった。結乃の中の核を、無数の欲望によって包み生まれた結晶。

結乃は生み落としたそれを、愛おしげに手に取る。結乃が望むと、羊水あみえきにまみれた黒の

真珠がビー玉のような大きさにまで収縮した。物理的な大きさは変わっても、内側から滲み出す禍々しい気配はほんのわずかにも減ずることはなかった。

「んふ……♡」

妖艶な笑みを浮かべて、結乃は木乃伊のように干涸らびた唇に、桜色の唇を重ねた。乾いた口腔に舌を入れ、唾液を送り込む。晶の名残を感じようと、貪るように舌を絡める。

「んっ……ちゅ……♡ はあっ……♡」

晶の名残を感じようとするかのように、貪るように舌を絡める。艶やかな舌を使って口蓋に、内頬に、舌に、歯茎に唾液を塗りたくっていく。

「れろっ♡ んちゅっ……♡ はあっ……♡」

甘く、蕩けた嬌声が響く中、結乃の唾液に潤いを与えられたように、晶の身体に生氣が戻りはじめた。

口内を愛撫する結乃の舌に、晶の舌が絡められる。無意識の動きでも、肉体に残った反射でもない。明らかな情欲を持った、貪るような動作。

返ってきた応答に、結乃は頬を緩めてさらに欲望^{だえき}を流し込む。

コクッ、コクッ、と晶の喉が鳴り、結乃の欲望を嚥下していく。

「んっ……はあ……♡」

名残惜しさを覚えながらも、結乃は結ばれた唇を離した。粘つく唾液は銀の糸を引いて

伸び、切れた。

結乃は自身の舌の上に、自らが生み落とした欲望の結晶を乗せて、再び唇を重ねる。

「んっ……♡」

舌先で晶の口内へと結晶を送り込むと、晶は結乃の唾液とともに、黒の真珠を嚥下する。干涸らびた亡骸が、みるみるうちに精気を取り戻していく。こけた頬には肉が付き、しなびた肌には色艶が戻っていく。窪んだ眼窩は元通りとなり、落とされていた瞼が上がる。その瞳には、見慣れた晶の優しい光はなく、代わりにずっと子宮の中に居座っていた、ドス黒い欲望が煌々と灯っていた。その輝きを結乃は知っている。その輝きを結乃はずっと——求めていた。

に、い、と。血色を取り戻した頬が吊り上がる。晶がすることのない、邪悪な笑みだった。晶の両手が結乃の身体に触れる。手の大きさも、かたちも、体温も同じだった。だが、違う。所有物の状態を確認するように、肉感たっぷりの尻に手を埋め、乳房を乱暴に捏ね回す。気遣いなどない、自分の欲望を満たすための純粋な情欲。

「んあっ……♡ ああ……♡」

潤んだ瞳で、結乃は与えられる官能に歓喜した。晶の——否、晶だったものの舌が、今度は結乃の口内に入り込み、愛撫する。唾液と唾液を交換し、啜り合い、舌と舌とを絡め合う。その官能に、結乃はビクビクッ、と痙攣しつつ絶頂に達した。

「賭けはオレの勝ちだな」

絶頂の余韻を残す結乃から、晶だったもの——クオルツは唇を離し、嗤った。

「つくづくオレは神に愛されているようだな」

自らの所有物であると刻み込むように、クオルツの手指は結乃の乳房を、尻を、好き勝手に弄ぶ。結乃はそれに抗うことなく、甘い吐息を漏らしながら、されるがままにしていた。

すべては、クオルツの計画のうちだったのだ。

ことはクオルツが晶の肉体を人質に、結乃を手に入れようとしたあの日にまで遡る。

結乃の精神力は強靱だった。どれだけの快楽を与えたところで、その心を疲弊させることはできても完全に侵すことはできないとクオルツに思わせるほどに。一時的に屈服させることはできただろう。しかし結乃の心は、一度折れても再起する、不屈の意志を持っていた。

そこでクオルツは、結乃に自分を封印させることにした。

完全な支配はできずとも、快楽に蕩けつつある結乃の心に、天啓を与えることくらいはできた。クオルツを封じ、晶を無事に取り戻す方法は、結乃がその身にクオルツを受け入れ、封印する以外にないのだと。

囁きかければ、結乃がそれを実行することを、クオルツは確信していた。

それほどに、結乃の晶への想いを信頼していた。

事実、結乃はそうした。クオルツは晶の中の自分を切り離し、快樂調教によって弱った結乃の内側に、自分自身の因子を注ぎ込んだ。

結乃が浄化したのは、その残り滓とでもいうべき部分だけだ。

そうしてクオルツは、結乃を内側から侵していった。毎晩のように淫夢を見るようになり、身体は常に発情し、クオルツが復活するための、人の欲望を求めるようになっていった。

それでもなお、結乃は晶を想い続けた。晶への強い想いが、結乃をギリギリの場所で押し留めていた。

だからこそ、クオルツはあの淫夢^{ユメ}を見せた。晶と出会うことのなかった、快樂だけの人生の可能性^Fを。一度では足らず、二度、三度と繰り返すうちに、結乃の晶への想いは薄れていった。愛情の量を減らすではなく——希釈。

クオルツの目論見は成功した。

人生のほとんどすべてを締めていた晶への慕情は、半分以上となり、四分の一以下となり、八分の一以下となり——結乃にとって、些事となった。

結乃にとって大事なのは快樂であり、それを満たしてくれる存在^{クオルツ}となった。そして今日、クオルツは自らの手でクオルツを再臨させた。

決して分の良い賭けではなかった。ひとつでも誤れば、そのままクオルツという存在は封じられ、浄化されていた。

それでも、クオルツは結乃を欲した。それだけの危険を冒してでも手に入れる価値のあるものだった。



すべてが仕組まれた罠であると告げられても、結乃は驚かなかった。

怒りや憎悪は沸き上がらない。代わりに沸き上がるのは、淫らな欲求だった。

ようやく現れた自分を満たしてくれる存在。今の結乃にとって、クオルツはかつての晶以上の、何にも代えがたい絶対存在だった。

クオルツが近くにいただけで、身体が火照る。その欲望を注がれたいと思うし、その欲求を満たしたいという献身の欲求もあった。

「御主人様あ……♥」

かつて教えられたとおりの呼び名で、結乃は新たな愛しい相手と呼んだ。

喉を抜けるだけで、その振動は子宮に届く。蜜壺からは愛液がとめどなく溢れ、足元に水溜まりを作っていた。

「淫乱な女だ。だが、それでこそオレの伴侶に相応しい。右手を出せ」

晶の肉体を使つて、晶の声帯を通して、クオルツは晶のものではない強引な語調で結乃を求めた。

「あつ——♡」

子宮が猛り、全身に官能が広がった。自分が、呼ばれただけで絶頂に達したのだと気付くのに一瞬を要した。

その余韻を振り払って、結乃はクオルツへと右手を差し出す。

「美しく染まったものだ」

クオルツが向けた視線の先には希晶石があった。黒く、昏く、澱んで、濁った力の象徴をクオルツは結乃の指からはずし、結乃が捨てた螺鈿の指輪とともに握り込んだ。

次にクオルツが手を開くと、希晶石から濁りは消えていた。最初からそうであったかのような、一点の曇りすらない欲望の輝き。螺鈿の指輪とひとつとなった、欲望のエンゲージリングだった。

「左手を差し出せ」

「あ……♡」

その言葉に、キュン、キュンと子宮が疼く。その意味を理解して、全身が歓喜に打ち震えていた。

恭しく差し出した左手の薬指に、指輪が嵌められ、溢れ出した欲望が結乃の身体を覆っていく。

「さあ、生、まれ、変、わ、れ、エスフェール。いや……結乃」

かつて、はじめてエスフェールに変身したときと同じ、自分ならざる自分の声が結乃の頭の中に響き渡る。

それは墮落の起句。

エスフェールに変身するときに使っていたものと似た、しかし致命的に違う言葉。

口にすればもう戻れないとわかっていた。それを——結乃は躊躇なく口にした。

「カッティング・フォルダウン……♡」

娼婦が男を寝台に誘うような甘い誘惑の声。

主人がそう命じたとおりに、結乃は——生まれ変わる。欲望の色に染まった希晶石から、桃紫^{マゼンタ}の光が波濤の如く溢れ出し、結乃の身体を一瞬にして包み込んでいく。

見るものを惑わせ、狂わせ、蕩かせる、墮落への誘蛾灯。

それはさながら闇の繭、あるいは二枚貝のようだった。エスフェールの晶衣が光に還元されると、溢れ出した欲望がそれを染め上げて、桃紫^{マゼンタ}の光の内側で、それらに代わる衣^{コスチューム}が形成されていく。

胸元に、両手の甲に、太腿に、足先に、そして髪に、指輪から溢れ出した光が大粒の黒真珠をあしらう。

コンマ数秒の間を置いて、全身にあしらわれた黒の真珠が光を溢れさせた。

胸元の黒真珠から溢れた光が半透明のレオタードインナーを形作る。ボディコンシャス



にも似た紫黒のアウトターパーツが肉感的な肢体を引き締め、腰には蝙蝠コウモリを思わせる翼の意匠が伸びる。華奢な指先から伸びた光は悪魔の爪のように指先を覆い、二の腕までをロンググローブが、太腿の半ばから足先までをニーハイブーツが、それぞれ形作り、覆い隠していく。

最後に髪を彩る光が髪飾りとなる。漏れ出した欲望に染まるように明るいつ茶の長髪が、夜の街を思わせる薄紫色に色付いてゆき、黒のコスチュームにも桃紫マゼンタの刺し色が入る。

結乃の下腹に刻まれた淫猥な紋様が伸びていき——完成する。

妖しく輝く桃紫マゼンタの瞳が微笑む。

自分の新たな名前を、結乃は理解していた。

結乃は名乗る。

「欲望ネガイを叶える欲望の忌石——幻晶忌石デゼスフェール・アルガリタ。ここに転生しました……♡」

新たな自分を定義する名を口にして、結乃の身体はビクンと跳ねる。

世界が、極彩色に見えた。今までの何倍も遠くから、他者の欲望を感じる。

「美しい姿だ。そしてそれ以上に——淫猥だ」

「ありがとうございます……御主人様♡」

美しい、という賛辞よりも、淫らに見られているという事実、結乃は、デゼスフェールは身を震わせて悦びを得る。欲望に包まれた身体は、先ほどまでも増して強く、快樂

を欲していた。

「来い、デゼスフェール」

言って、クオルツは自身の股間を示してみせた。屹立していたのは、晶の肉棒によく似た、しかしそれより遙かに逞しい肉の巨塔だった。

これまでの淫夢の中、大ききだけならばより大きかったものはある。しかし目の前に示されたそれは、結乃の魂に刻み込まれた、錠に対する鍵だった。

結乃を満たしてくれる唯一の存在に、溢れ出す唾液が止まらなくなる。

「はい……御主人様あ♡」

恋人に甘えるように、主人に媚びる愛玩犬のように、結乃は甘い声を発してクオルツに縋りついた。クオルツの腕が、結乃の身体を抱き寄せる。

結乃は、自分の所有物だと、ここにはもういない誰かに勝ち誇るように。ぐにゅりと。クオルツの手が結乃の淫乳を捏ね回す。

「んあ♡ ああ♡」

「なんだ、またイッたのか？ その身体がそれほど気に入ったのか？」

「はい……とつても……♡」

股間を覆う晶衣のクロッチが、物欲しそうに口を開く。肉感的なふとももの隙間に怒張が突き込まれると、愛液がとろお、と溢れて挿入をねだる。

「御主人様あ……私のおまんこ、ご賞味ください……♡」

艶を帯びた結乃の言葉に、クオルツですらも興奮を隠せない様子だった。晶のものである顔を下卑た笑みに歪めて、結乃の内側へと自分自身を突き込んでゆく。

処女のようにぴたりと閉じた割れ目は、しかし処女ならば到底啜え込めるはずもないクオルツの巨根をいともたやすく吞んでゆく。抵抗はなく、それでいて受け入れた肉棒を硬く締めつけ愛撫する淫魔の女陰。

「ほう……これは極上だ」

その刺激はクオルツにとっても満足のゆくものだったのか、息を吞んだ様子に、結乃は微笑む。

さらに奥へと突き込もうとしたところで、クオルツは動きを止めた。より先への進入を阻むものがあったからだ。

「これは――」

「処女膜、です。御主人様……お願いがあります♥」

かつて、望まなにかたちで奪われた純潔を結乃は取り戻していた。

今となってはそれを恨むつもりも、後悔するつもりもない。しかし結乃には願望ネガイがあった。
た。

「純潔ヴァージンを、愛しい人に捧げたいって、ずっと思っていたんです。でも、あのときはあつくんだと思って、御主人様を受け入れました。だから……」

それは、少女の他愛ない幻想ユメで、願望ネガイだった。

「御主人様を、御主人様と知った上で、この純潔をもう一度捧げさせてください♥」

「くだらないロマンチズムだが……お前のためだ。付き合ってやろう」

言葉とは裏腹に、クオルツの肉体は明らかな興奮を示していた。

思い出すのは、一度目の処女喪失の瞬間だった。そのときの肉棒と比べて、クオルツのものはふたまわりは大きく、凶悪だった。女性を狂わせ、虜にする。快樂を与えることで、快樂以外のすべてを捧げさせる支配者の資質。

ぶち、ぶちぶちっ、と。

クオルツはあえてゆっくりと力を込めてくる。純潔を示す繊維が一本、また一本と千切れていくたび、結乃は絶頂を味わっていた。純潔とは名ばかりの、無数の牡を啜え込んできた膣が、再び開かれていく。

「あっ♥ ああっ♥ 御主人様っ♥ 御主人様あっ♥」

破瓜の快感にヨガリ仰け反る結乃を、力強く抱き寄せながら、クオルツは肉の凶器で結乃の純潔を引き裂いた。

「あっ♥ ああっ♥ イクッ♥ イクイクウツ♥ イキますうっ♥ 私っ♥ 処女喪失で

イクうううっ——♥」

欲望の成就に、結乃はさらに高い絶頂に押し上げられる。

痛みはない、出血もない。代わりに結乃は、プシュウツ、と潮を噴き散らした。

身体が大きく仰け反って、淫乳がたゆんと激しく揺れる。その振動すらも、蕩けるほど

に心地良かった。

「御主人様を置いてけぼりで、自分だけ満足するつもりか？」

「申し訳、ありません……♡ もちろん、御主人様の伴侶として、しもべとして、ご奉仕させていただきます……♡」

キュウっ、と。膣道が柔らかく、それでいてぴったりと、主人あるじの剛直を隙間なく抱き締める。密着した肉の凶器からどくん、どくんと心臓にも似た鼓動が伝わってくる。牝を狂わす欲望の鼓動に、子宮ココロが高鳴り、結乃は腰を振りはじめ。

「ああっ♡ 御主人様のチンポ、すごいっ♡ 私の、気持ちいいところ、全部、当たるっ♡」

自分が奉仕する側だというのも忘れそうになるくらいの官能に、結乃は甘い声を漏らす。しかしそうする間も、腰の動きは止めはしない。

最初はゆっくりと、お互いのすべてを丹念に感じとるような速度で。

以前であれば、正気を保てず狂ってしまったであろう官能。しかし半ば幻魔と化した今の結乃には、膣から全身に広がってゆくのを堪能するだけの余裕があった。

だからこそ、もっと、もっと、と。果てのない快楽を魂が求める。

味わい尽くすような抽送の速度に焦れたのか、クオルツの手指が結乃の淫乳を揉み潰す。乱暴な扱いにも、結乃の身体は痛みではなく快感だけを送り返した。

「はい……御主人様あ……♡」

主人^{あるじ}の要求に、結乃は悦びを覚えながら応じる。腰の抽送を加速させると、交合部からは愛液が連続して珠のように飛沫^{しぶ}く。

太さや長さ、形状といった細やかな感覚こそ伝わってこないものの、その分快感が連続して弾けていく。

「晶のモノとどっちがいい？」

腰を突き込みながら投げられた問いかけに、結乃は頬を歪ませた。過去に愛した男との比較。その悪辣な思考に結乃の子宮^{ココロ}は打ち震える。

愛情という何にも代えがたい後押しをもつてしても結乃を繋ぎ止めることのできなかった優しい負け犬と、たった一日でそれを覆した支配者。勝者と敗者の優劣など、最初から比べるまでもなかった。それでも、結乃は比べていく。それによって、いかに今自分を満たす支配者の味が甘美なものかを強く強く感じてゆく。

「んあっ♡ ああっ、イイっ……イイですうっ♡ 御主人様のチンポおっ♡ 太さも、長さも、カタチもおっ、全部っ、ぜんぶっ♡ あっくんのおちんちんよりいいのおっ♡ あっ♡ あっ♡ ああっ♡」

従順に応えた結乃への褒美と言わんばかりに、クオルツは結乃の淫乳を激しく揉みしだく。淫猥な快楽器官となった乳房は、晶衣の中でスライムのようにぐにゅにゅりと変形させられる。

「こちらも随分と豊かに実ったじゃないか」

「あぁっ♡ はひっ♡ おっぱいっ♡ 弱いんですうっ♡ もтттт、もттといじめてえっ♡」

「いいだろう。卑猥に育った淫乳でイけっ！」

結乃の懇願にクオルツも応じる。両の手で、てのひらに収まらないサイズの爆乳を揉み捏ねながら、ぷっくりと膨らんだ先端が爪と爪に挟まれ、潰される。

「あっ♡ あぁっ♡ あぁぁぁっ♡」

淫乳から流れ込む強烈な快感が、結乃を絶頂へと押し上げる。

追い討ちをかけるように、クオルツはそれまで結乃に任せていた腰の抽送を自らも開始して、絶頂に至った結乃が、その余韻から降りてくることを許さない。

力強く突き込まれた剛直が最奥に届くたび、堕ちきるところまで下ってきた子宮を叩きつける。

「」
結乃の喉からは甘く甘く甘い、言葉にならない蕩けきった嬌声だけが漏れていく。

子宮に響く快感の振動が全身へと届き、結乃の中で反響を繰り返す。

それも冷めやらぬまま、さらに次のピストン。硬い、鋼のような亀頭が、子宮口を暴力的に殴打する。

ただ暴力的なだけではない。人間^{ヒト}を快楽で墮落させる欲望の化身、幻魔を名乗るに相応しい圧倒的な性技巧。結乃が自分ですら知らないような弱点を、乱暴としか思えない高速

のピストンの中での確に刺激してくる。

「ああっ♥ これっ♥ これっ♥ これええっ——♥」

淫夢^{ユメ}の中ですら味わうことのできなかつたすさまじい官能に、結乃は歓喜の悲鳴を上げる。疑う余地もなく己を支配する絶対的支配者の感覚に、結乃の膺はぴたりと吸いつき、暴力的な抽送の中でも奉仕を続ける。

そんな中、結乃の欲望を感知する嗅覚はクオルツの内側で煮え立つ欲望をしつかりと感じていた。それがもう、爆発のときを待っているということも。

媚びるような吸いつきに、クオルツの剛直がビクビクと蠕動をはじめめる。その身体は完全に、結乃の奥へと欲望を吐き出すことを求めていた。だから——

「御主人様あ♥ お願いしますう♥ 私にっ♥ 御主人様のしもべの子宮に、御主人様の欲望ザーメン注ぎ込んでえっ♥」

「くくく……もちろんだとも。射精^だすぞ。その淫乱な子宮で、主人の味を受け止めろっ！」

クオルツがひととき強く腰を打ちつけ、肉感を増した結乃の尻がぶるんっ、と大きく震えた。堕ちきった子宮口は叩きつけられた亀頭に吸いつき、深いディープキスを交わす。

びゅるっ！ びゅるるっ！ でゆるるるるるるるるるうっ！

煮え立つ睪丸から、固体にも近いほどの硬く重い欲望が込み上げて、熱いキスを交わし続ける結合部から結乃の子宮へと注ぎ込まれていく。

子を作り、育むための聖域であつたはずの場所は、今の結乃にとって乳房や膣と何も変わらない、性感帯のひとつでしかなかった。

濃厚な――これまでの誰よりも濃厚な欲望が結乃を満たしていく。その欲望を、希晶石――否、忌晶石へと生まれ変わった黒の真珠が増幅し、二人の間を欲望が循環する。

全身が痙攣し、筋肉が反射によって収縮する。背骨が折れそうなほどに大きく仰け反り、Hカップの淫乳が暴れて揺れる。

「イグッ♥ イグイグウウツツ♥ 御主人様の欲望ザーメンうつ♥ 子宮にいっぱい注がれてるうつ」

無意識に宣言したそのとおりに、結乃は絶頂へと到達する。現実ではもちろんのこと、淫夢の中でも味わったことのない、極上の絶頂。半ば幻魔と化した身ですら、狂ってしまった。いそうなほどの多幸感。女性としての思考の幸福が結乃の全身を包み込んでいった。

「ああ……ひい……はあ……♥ んあ……♥」

快楽の余韻が、結乃の身体をダラリと弛緩させる。絶頂直後の敏感になった身体は、ただ息をするだけでも蕩けるような快楽を結乃に返してきた。

その場に崩れ落ちそうになる結乃を、クオルツが抱き留め舌を突き出す。それを見て、結乃もまた唾液にまみれて蕩けかけた舌で答える。

「んっ……ちゅ……♥」

支配する者とされるモノ。両者の舌と舌とが絡み合う。愛を確かめあうための行為では



なく、快楽を貪るための性行為。ただの人間ヒトであれば脳が焼き切れていてもおかしくない人外の快感が、デゼスフェールの全身を駆け抜けていく。

「結乃。お前は……オレのものだ」

「はい……御主人様♥」

主人あるじの言葉に、結乃はうっとりとして頷いて、その身を預ける。

「これで——ひとつ」

クオルツの言葉が、淫気の立ちこめる部屋の中に響いて消えた。

●あとかき

どうもADUです。

まずはこの本を手にとってくださったこと感謝します。無断転載は許さん。呪うぞ。
最近はおとがき自体を書かない人も増えていると聞くのですが本当でしょうか。

フォローワーさんに言われて、私の初同人誌がもう九年も前なのだとはじめて実感しました。来年は私ももう同人活動十年目ということでもあります。その割に成長していないというか、いつも締切りギリギリというか。

それでも私が同人作家として活動を続けられるのは、ひとえに読者の皆様の温かい声とご支援あつてのことです。

本当にありがとうございます。

前置きが長くなりましたがここから内容について。

以前からお伝えしていた通り、これにて聖晶希石エスフェール真珠の章は完結となります。

本当は前後編とするつもりだったのですが、主に私の執筆速度などの問題で三巻構成となつてしまいました。

オリジナル変身ヒロイン悪堕ちNTRを書くにあたって、ある程度の積み重ねがあつてこそ魅力的に映ると思つて、随分と時間がかかつてしまいました。

待つてくださった方々はもちろんのこと、まだ元号が平成だった頃にキャラデザを作つ

てくれたのにこんなに出すのが遅くなって空気さんごめんなさい。

読み返してみると本文はあらだらけにも感じますが、それでも、書きたかった内容を詰め込むことはできていると思います。

本当だったら本文中で取り上げられているトイレでおじさまとシたときのシーンやいろいろとあったのですが、このページ数にしてなおカツカツだったもので泣く泣くカットすることになりました。

それでもあとがきは書きたかったんです。

Tinctionisというのはラテン語で染色。特に真珠の染色に使う単語です。前巻の副題Zoyaux insérésはフランス語で核入れという真珠の養殖用語でしたが、その意味が今巻で伝わってればなと思います。

エスフェールとしての結乃のメインストーリーは終わりましたが、今後も結乃のことは書いていきたいと思っています。どんな展開でも後付けで正史に入れられるようにしたいという一心で夢の中での無限調教という設定を考えましたからね。

キャラクターデザインから表紙、挿絵といったイラストの諸々を担当してくださった左藤空気さん。

今回ゲストイラストを快く引き受けてくださった星井ガルさんとりくさん。

その他、ツイッター改めX上で絡んでくださった皆様など、たくさんの人々に心よ

りの感謝を。

ちなみに私は桂⁸月生まれ。誕生石はペリドットです。





奥付

聖晶希石エスフェール Tinctionis

発行日

令和5年8月13日

発行者

ADU（サークル：ニワカカミキリヤモドキ）

連絡先

Mail: adu_64@yahoo.co.jp X: @ADU_64

無断転載厳禁。

Reproduction without permission is prohibited.

この本の内容をWebサイト等に無断転載した場合、

「1ページにつき10,000円」および「1ページビューにつき500円」

の支払いを行う契約に同意したものと見なし、対応させていただきます。

聖晶希石

エムフェール

HOLO CRUSTAL
ESPHÈRE

Tinc
tionis

presented by

ニワカカミキリヤモドキ



